
遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

【Nコード】

N7785Y

【作者名】

星

【あらすじ】

なぜか、私と双子のお姉ちゃんは離れ離れになった。父がお姉ちゃんを連れて、どこかへ行ってしまったからだ。

これはとある双子の物語。

光に生きる妹と、闇に生きていた姉の物語。

零の軌跡、碧の軌跡のネタバレあります。また、原作改変の可能性

があります。

おかあさんのはなし

「ねえ、おかあさん」

「なあに、フエン」

東方人街の外れにある小さな家。そこに、少女とその母である女性が住んでいた。

パチリ、パチリと鳴る囲炉裏を囲み、夕飯を食べていると少女が無邪気な声で母に話し掛ける。

「なんで、わたしにはおとうさんがいないの？」

あまりにも無邪気な問いに母の箸が止まった。

いつかは来ると思っていた問いだったが、あまりにもそれは唐突すぎた。いや、ただ逃げていただけなのかもしれない。

もうこの子も8歳だ。

日曜学校に通い始め、外の世界にも目が行き始めた年頃だ。父がいないことを気にするのは最早時間の問題だっただろう。

母は数回、深呼吸した。決意を固め、口を開く。

「お前のお父さんはちゃんというわ。ただ、お父さんには受け継がなければいけない道があつて、次の世代にその道を渡さなければいけないの」

「せだい？ なにそれー」

「ふふふ、まだ難しかったかな。そうねえ、大事なお仕事を続けていくのに必要なのよ」

「だいじなおしごとって？」

「それは言えないけど……。でも、いつか双子のお姉ちゃんに会えたら教えてもらえるかもしれないわね。お前の片割れに、会えたら

##

お母さんの話によると、私には双子のお姉ちゃんがいるらしい。らしい、というのは私が幼い頃、お父さんが私のお姉ちゃんを連れてどこかへ行ってしまい、私は幼すぎて覚えてないからだ

私と同じ、紫紺の髪と瞳を持ったお姉ちゃん。

結局、お母さんは私にお父さんの仕事を教えてくれなかった。お姉ちゃんが継ぐであろう、仕事。

私は、知りたくて知りたくてたまらなかった。

だから、死に物狂いで特訓し、遊撃士になった。カルバードで推薦状を集め、そして17歳になったときに、準遊撃士から正遊撃士へと昇格した。

その間、お姉ちゃんもしくはお父さんの情報はまったく集まらなかった。

そして——私はなぜか、この街に来ている。
貿易都市クロスベルに。

「お初にお目にかかります。正遊撃士、フェン・マオ。本日より遊撃士協会・クロスベル支部に正式に所属させていただきます——！」

お姉ちゃんはどこだ！（前書き）

早くも暴走回です。

お姉ちゃんはどこだ！

遊撃士協会クロスベル支部へ挨拶を済ませた後、フェンは東通りで情報収集をしていた。もちろん、その情報収集とは顔のある意味見たことがない双子の姉についてだ。
通りかかる人に「私とよく似た人を見かけませんでしたか？」といったものように尋ねる。

「うーん、見てないねえ」

「遊撃士だー！ 人探し？ ぼくも手伝ってあげるー」

「紫紺の髪で美人さん、ねえ。あ、なんかの雑誌で見たかもしれないわ」

しかし帰ってくる答えはやはりめぼしいものではなかった。

雑誌って、そんなところで記事になっているくらいだったらフェンもこんなに苦労していない。

今日得られた1番の情報といえば……

「君と似た女性？ ああ、見たことあるよ。歓楽街でさ、たまに見かけるんだ。あ、でもでも君の絶壁な胸とは違ってボインだったよ」

絶壁は余計だ。

1番有力といえは有力だが、姉がボインと評されるほどの胸を持っているわけがない。

一卵性双生児なのだ。

遣伝子はほぼ一緒なのだから、姉がボインなはずがない。

もしそうだとしたら、あまりにも不公平すぎる。

「そもそも、クロスベルにいるのかなあ？」

母がたまにしてくれた話しによると父は各地を転々としていて、出会いは本当に偶然だったらしい。

その運命的な出会いから燃え上がる恋が始まり、両親に反対され駆け落ち。

そしてスピード結婚。

ちなみにできちゃった婚だとか。

どんだけだ。ふざけるな。

駆け落ちして子供まで産ませたくせに家を出ていくなんで、しかも双子を引き離すなんて。

いくらなんでも無責任すぎる。

話しが逸れた。

とにかく問題は姉がこのクロスベルに来ているかどうかだ。

カルバードからクロスベルに来たのは協会本部から要請を受けたのが理由の一つ。でもその最たる理由はカルバードで姉の情報がまったく見つからなかったことだ。

カルバードで掠りもしないのならば、もしかして外国にいるのではないか。

そう考えたからこそ、フェンはここに来た。

来たのだが……時はすでに夕方。

茜色に染まる空が今は目に痛い。

港湾区のベンチにもたれ掛かるとその紅さがよくわかる。

フェンは途方に暮れていた。

見つからなかったのだ。姉の情報も、今日泊まる宿も。

「……はあ、今日はギルドで休むしかないかあ」

新しい土地に来たら、その地の宿に泊まる。これが習慣化したのは、

もちろん姉の情報を求めてだ。

しかしここ最近ではギルドの部屋よりも宿の方が肌——というよりも身体にあってしまった。

ギルドで寝るよりも、宿で寝たほうが疲れがよく取れるのだ。

これによって宿に泊まることがますます定着し、ついには宿がないとダメダメな一種のダメ人間になってしまった。

「むむ、ということは野宿の方が疲れが取れるかも！」

これは名案だ。

フェンの耳はすでに獣並みと言われるまでの聴覚を誇る。つまり、どこかの屋上で寝ていれば勝手に情報が入ってくる。

「おおお！　すごい、私いつも以上に冴えてるかも！　よっし！」

俄然やる気。勢いをつけてベンチから離れ、手は素早くポーチへ。

それから足早に港湾区を南に抜け、東通りへつくと人気のない路地へと入り込む。

「このあたりでいっか。よい、しょっと！」

鉤爪のついた縄を取り出し、家の屋根に引っ掛ける。この手の作業は訓練所で嫌というほど練習した。それこそ、教官役であるベテラン遊撃士に止める！　と怒鳴られても無視して続けた。

おかげで今ではいかなる状況下でも、どんな場所でも引っ掛けることができる。

フェンは家の屋根に登ると、そのまま中央広場方面へと鉤爪を駆使して移動していく。

あるときはターザンのようにぶら下がりながら勢いに任せて移動し

たり、遠くにある建物に行く場合は引つ掛けた縄の上を歩いたりもする。

「ふう、とりあえずこのボロいビルの屋上でいいよね。あ、猫ちゃんお邪魔するよ」

「にゃ」

中央広場の外れにある、ちょっと浮いた古いビルの屋上が今日のフエンの寝床だ。

先住、猫であるらしい猫の頭をなでなでした後、出入口である扉の上へと登り寝袋をさっそく用意。

少し転がってみるが——うん、なかなか悪くない感触だ。

特に、この石の無機質な冷たさが心地好い。

「猫ちゃん、干し肉いるー？」

「にゃ」

夕飯の干し肉をポーチから取り出し、猫に見せるとそっぽ向かれる。やっぱり煮干しじゃないとダメなのかな？　と思いながらフエンは干し肉を口に含んだ。

「……………うま」

ブラックペッパーのピリリとした辛さがたまらない。

（ちっちゃい頃、おいしすぎて毎日食べてたらお母さんに叱られたなあ）

懐かしい思い出に浸りながら、屋上で寛ぐ猫を観察する。

おお、伸びた伸びた。

これで首が伸びたらろくろ首だ。

おっとそうだ。この猫ちゃんには頼みたいことがあった。

「あ、そうそう。明日朝4時に起こしてね、猫ちゃん」

「……………」

完全なる無視。フェンの言葉など聞く価値もない、とばかりに黒猫は背を向け、ついには毛繕いまで始める。

これは信頼されているのか、いや違う。舐められているだけだ。

（こうなれば、最終手段っ！）

一度で良い。猫に起こしてもらいたい。

その願いがフェンにある奥義を発動させた。

それは――

「お願いします、猫様。私を朝4時に起こしてください」

膝を折り、両手と頭を地面にこすりつける。つまりは土下座だった。

「じゃ」

特務支援課

特務支援課の朝は早い。

支援課が設立されて初日に決めた料理当番の順番通りに沿うならば、今日の朝ご飯の当番は我らがリーダー、ロイド・バニングスである。

「ふあゝ……さあて、今日は何にするかな」

昨日の夕飯はティオが作った肉鍋だった。こつてりしていたが支援要請を終えたロイドたちにとっては明日を円滑に過ごすための良い栄養分となり気になるほどではなかった。

しかし朝までこつてりしたものでロイドやランディは良いかもしれないがエリイやティオの女性陣はキツイかもしれない。胃もたれなどがあつては支援課の仕事の効率は格段に下がる。そのうえ、手配魔獣の依頼だった場合は命に関わる。

ならば、朝はカルバードの典型的な朝ご飯である豆腐を使った味噌汁と焼き魚が良いかもしれない。

午前5時に起床し、朝ご飯のメニューについて考えながらロイドは一階へと下りた。

真っ直ぐ厨房へ向かい、下ごしらえをして、調理に取り掛かる。

味は薄すぎず濃すぎず。あくまでロイド自身の舌を基準にしたの味付けだが、今まで文句が出たことは一度もない。

文句、といえばランディが昼食にふざけてUマテリアルを出してきたときはすごかった。

ティオがロバート主任に対する毒舌の限りをランディに尽くし、最

最終的には土下座までさせた。

どうやら昨夜、ランディはティオにみつしいをケチャップで描いたオムライスを作ると約束していたらしい。

その約束を破った挙げ句にウマテリアなんて食えないものを空腹のときに出され、ティオの堪忍袋もブツリと切れたというわけだ。

ところでこのウマテリア。ランディがわざと食卓に並べたわけではなく、なぜか偶然でできてしまったものだったとか。

もしかしたら食べることができのでは、と時間がなかったのも手伝って出してしまったのだとか。

「ランディの二の舞は踏まないようにしないとな」

下ごしらえを終え、ロイドは火を扱う調理へと移る。

それから朝食を作り終えたと同時に支援課のメンバーがリビングへと集まり、ほどなくして朝の食卓が始まった。

「これは、東方のお料理かしら？」

味噌汁をスプーンで掬い口に運んだエリイが興味津々に尋ねる。

本当に、エリイはなにをするのも優雅だなあと思いつつロイドは頷いた。

「ああ。カルバードの朝の定番なんだ。叔父さんの家にいる頃に教わってね。よかったら教えるよ」

「じゃあ、明日のお昼にでも教えてくれる？」

「ああ、もちろん」

そんなこんなで朝食を終え、端末で支援要請を確認する。

今日は手配魔獣が2件。雑用が2件だ。

「また延滞本の回収ですか」

呆れた、とばかりにティオは呟く。

あまりにもいい加減すぎると言ったところか。これでまたレイモンド捜査官が延滞していたら申し訳なさすぎる。ランディもそう思ったのか

「また身内が延滞してんじゃねーだろうな」

「それは、ないとは言切れないわねえ……」

「とりあえず、コッペに餌をあげたら行こう」

#

「はい、コッペ。ねこまんまです」

「にゃああ」

屋上でひなたぼっこをしていたコッペに餌を上げると、嬉しそうな声を上げた。

ガツガツと食べ終わると、コッペはいつものように身を低くしてお礼の品を取りに行こうとする。

「にしてもよお、こいつどっからクオーツなんてもの持ってくんだ？」

「そこまでは私にも……まあ、コッペですし。人の入れないところ

にも入っていただけますから」

ぴょん、と身軽な動きで飛び上がるコッペ。コッペが戻ってくるまで談笑でもしよう、そう思っていたが――。

「にゃん」

「げふっ！」

なにか、猫に思いきり腹に乗っかられたときのような呻き声が、屋上に響いた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なあ、今、なんか聞こえなかったか？」

続いた沈黙をランディが打ち破る。

「聞こえました。どうやら、上に誰かいるようです」

「おれが見てくるよ」

ロイドは慎重に屋上の高所に近づく。他のメンバーは万が一のために武器を構えた。

高所の淵になんとか手を掛け、よじ登る。すると、そこには紫紺の短い髪を持った少女がいた。

「うつうつ……内蔵でちゃうよ猫ちゃん。優しく起こしてって言うたじゃないかあ」

お腹をさすりながら身を起こす少女。同じくらいの年の少女にロイドは呆気にとられた。

まさか、同じ年の少女がこんな屋上の高所で寝ているなんて誰も思わないだろう。

「ん？」

ロイドの気配に気づいたのか、少女が振り向く。

それから、ロイドの存在を認めた少女は寝袋から出ると正座をして丁寧に挨拶してくれた。

「どうもお邪魔しました。フェン・マオです」

###

「ということは、泊まる宿がなかったから支援課の屋上にいたってことですか」

「うんうん。そーゆーこと。あ、敬語じゃなくても良いよロイドくん。多分年近いし」

猫——コッペに踏み付けられ住人に見つかってしまった後、彼らに説明を求められたためフェンは屋上で寝るまでの経緯を話していた。話し終えると住人の彼らは目を大きくして驚く。

「だからって普通、ひとんちの屋上で寝るか？」

呆れた、と手で額を覆うランディに頷くエリイ。

酷いなあ。カルバードじゃ常識なのに。お母さんも野宿の基本は屋上だって言ってた。

「というか、どうやって屋上まで？ 誰かが通ったような足音はしなかったけれど……」

「ちつつち。エリイちゃん甘いね。屋根伝いに来たに決まってるじゃん！」

「得意げに言うことじゃないだろ。一応、不法侵入だぞ」

「お堅いぞロイドくん！ 警察じゃあるまいし、ここは笑って流さないと」

笑え笑えと手で変顔を作る。

すると、みんな一様にため息を吐いた。あー、なんか変なのに会ったやつたなあ、と言わんばかりの態度だ。

空の青さが恨めしい。

くそっ、そんな爽やかな青空を見せてどうする気だ！

私が痛い子みたいじゃないか。

くうー、と変顔のままのフェンが一人心中で唸っていると、立ち直ったロイドが一歩前に出た。

右手になにかを持ちながら。

「一応、おれたちは警察だ」

毅然とした声でロイドは改めて役職を言う。

一瞬ポカンとしたフェンだったが、いやいやまさかと首を振った。

しかしロイドの右手に握られているのは紛れも無く警察の証である手帳。

「……まじ？」

「マジだ。今回だけは見逃すから、もう他人の家の屋根で寝るのは

やめるんだぞ？」

そんな約束誰がするもんか、と首を振ろうとすると、ロイドの真摯な視線が刺さる。

フェンはしばらく唸っていたが、ロイドの強い視線に渋々頷く。

「うう……。わかったよー。でもなんで警察がこんなにボロいビル使ってるのさあ。反則だよお」

「そ、それを言われるとちよっと……」

「言いづらいわよね……」

「ま、特務支援課がちよっと変わってるってことさ」

「仕事内容はほぼ遊撃士の真似ごとですから」

苦い顔をして言うロイドたち。フェンは首を傾げた。

「遊撃士の真似ごとなんかしてどうすんの？」

不思議に思ったことを尋ねると、ロイドたちは一瞬驚愕し、すぐに納得したように頷く。

「そうか、フェンは旅行で来たばかりだから知らないのか」
「んん？」

勝手に旅行者扱いされたことが引っかけたがそのまま流す。今は遊撃士の真似ごと部署の理由が知りたい。

「クロスベルでは警察の評判が悪く、このままでは市民の信頼を完全になくしそだったんです。そこで、少しでも遊撃士の人気を引っ張ってこようという訳です」

「なるほどなるほど。それが特務支援課なんだ——って、遊撃士と

「いえばもう時間ヤバイ！」

突然騒ぎ出したフェンに支援課の面々は一様に頭に疑問符を浮かべた。

それに構わず、むしろそんな余裕など彼女には一切なくフェンは懷から鉤爪付きのワイヤーを取り出して近くの屋根に引っ掛ける。支援課が呆気にとられる中、フェンは屋上の地面を蹴る。

「じゃ、まったねええええ！ あ、あと私と似た人見掛けたら連絡ちょうだいーい」

とん、と軽い身のこなしで西通りに下りるフェン。ブンブンと手を振って中央広場へと走り去っていく彼女の紫紺の髪を見つめながら、支援課は口を開く。

「嵐のような人だったわね……」

「ああ、というか連絡頂戴って……」

「知らねえよって話しだよな。美人なのにもったいねえぜ」
「朝なのに、どっと疲れました」

特務支援課（後書き）

はい、破天荒な妹ちゃんでした。

そして特務支援課のみんなの言動がいまいち掴めないという。
あれ、一番馴染みのある四人なのになあ……

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

アルモリカ村

「ミシエルさん、なんで市外の依頼ばっかなんですか？」

「遅刻した罰、と思つてちょうだい」

3時間ほど遅刻したフェンは、呆れ顔のミシエルに不満をぶつけた。今日は依頼をこなしながらお姉ちゃんの情報を集めるつもりだったのに。

どうやら、お姉ちゃんを探すための手段が今回は障害になりそうだな。なんてけしからんことだ。

「ミシエルさん」

けしからんことをするギルドの受付に、真剣な顔で話しかける。

ミシエルもフェンの纏う空気が変わったことに合わせて、身乗り出した。

「なにか、重要な情報でも手に入つたの？」

「ええ」

真剣に切り返す。しかし、フェンの頭の中は疑問符でいっぱいだ。

「実は……」

「実は……？」

ピリピリした空気。

東通りで遊んでいる子供の声が、やけに大きく聞こえる。彼がなにを期待しているのかはフェンには理解できないが、そんなものは関係ない。

「アルカンシエルのチケット、前にいた支部の方に頂いたんです」
「……………は？」

緊迫した空気が妙な形で破られる。あまりにも日常的過ぎる話題に変えられミシエルの思考回路が停止した。

フェンはその隙を逃さず、持ち前の身体能力で出入口へと素早く移動。

「てなわけでアッデュー。私はこれからアルカンシエルの公演が始まる時間まで市外を巡回してきますんで。あ、掲示板の依頼は適当にやっときますんで安心してくださーいっ！」言いたいことだけ言って、ギルドから出ていく。

数秒後

「ちよっ、待ちなさい！ フェンっ！」

珍しく、ミシエルの怒声がギルド内に響き渡った。

###

「そうそう、今朝ギルドから男性のすごい怒鳴り声が響いたの。びっくりしてじゃがいも落としちゃったわ」

東通りの人から気になることを聞いたロイドたちがギルドを訪ねると、異様な空気が立ち込めていた。

呆れとか、どうしようもない憤りとか、つい最近ロイドたちも体験したような感じのする空気。

しかしそれはチリンチリンという来客を告げる鈴の音によって緩和された。

「はい、いらつしゃい——ってロイドくんたちが」

「どうも、こんにちは。ミシエルさん」

顔を上げて営業スマイルを作るミシエル。だがその顔はどこか疲れきっていた。

ティオも持ち前の感応力で察知し、

「どうしたんですか、ミシエルさん」

「うゝん、そのねえ。共和国から新しい子がきたのよ。一応、優秀な子がね……」

「一応って、ずいぶん強調するっスね」

「いろいろと厄介な子でね。でも、優秀なのは本当よ。あなたたちも頑張らないと、どんどん仕事持ってかれちゃうわよ。あの子、嗅覚と聴覚が異常なぐらい良いらしいから」

「嗅覚と聴覚が良い、というと？」

ロイドが訪ねると、ミシエルは大きなため息をついた。

「あの子、事件が起こる前にその元を解決しちゃうのよ。手配魔獣なら人に害を与える前に始末するし、落とし物とかだったら持ち主

が依頼を出す前に届ける。最近の大きな出来事だと、共和国のテロ組織が活動を始める一歩手前で阻止しちゃったとか」

そう聞いていたからどんな子なのか楽しみにしてたら、あんなに破天荒な子だったなんて。

ミシエルは眉間のシワを伸ばす。ロイドたちはあまりのありえなさに啞然とした。

つまりこちらに来る支援要請そのものが来なくなる可能性があるのだ。

「あの、東通りの方から怒鳴り声が聞こえたと伺ったんですけど、それは……」

「ああ、外まで聞こえちゃってたのね。今話した子のことではないのあったの。まあ、会えばわかるわ。とんでもなくふざけた子だから」

これ以上、その人物のことについて話したくないとばかりにミシエルは口を閉ざした。

疲れきった彼の様子に、ロイドたちは相当厄介な人なんだろうなあ……と同情した。

###

ギルドで厄介者扱いされている頃、フェンはアルモリカ村に来ていた。

のどかな田園風景に、風に揺れる若葉の木々たち。鳥の囀りが奏でる自然のハーモニーを聴き入りながら、特別にパック詰めしてもらったオムライスを口いっぱい頬張る。

「んーっ！ うまあ！ いっやー、自然の中で食べるオムライスは最高だねっ」

村長宅の近くの木に寄り掛かるフェンは喜びの声を上げた。

お姉ちゃんの情報は相変わらず手に入らなかったが、行く途中で巨大甲殻魔獣を倒したお礼にオムライスがもらえた。

持つべきものは刀。売るべきものは恩。母の教えは真実だ。

「お前もオムライスを食べたら良いのにね。星嵐」

腰に下げた相棒の柄を撫でる。

星嵐はフェンが11歳の頃、母から譲り受けた刀だ。碧く美しい刃の切れ味はどんな敵をも斬ってくれたし、どんなに心細いてきでも一緒にいて、輝いてくれた。

フェンにとって、星嵐は最早ただの刀ではなく、家族だ。

だから、オムライスの素朴な味を共有できないのが残念でたまらない。

フェンは最後の一口を胃に流し込むと、すくっと立ち上がった。短パンを叩いて、真っすぐ宿へと向かう。

「クロスベルは賑やかで楽しいけど、やっぱり田舎の方が静かで落ち着く落ち着く。田舎最高！ やっほーい」

元気良く宿のドアを開ける。

さきほどのオムライスをもらった宿は昼時で混んでいる。農作業から戻ってきた人たちの視線がフェンに集まった。

「おお、フェンさんか」

大声に怪訝な顔を浮かべていた男たちは厄介な魔獣を倒してくれたフェンだと気付くと、一斉に笑顔になった。

「さつきはどうもありがとうございました。オムライス、おいしかったですよ」

「そりゃあ良かった。魔獣を倒してくれた恩人に、マズイもんは出せねえからな。宿の部屋、空いてるけど泊まるか？」

「もちろん泊まります！ どの部屋ですか」

「1番奥の部屋だよ」

##

田舎の夜は早い。

アルモリカ村の空には丸い月が浮かんでおり、村を柔らかい光で照らしている。

フェンは、宿の屋根で月を眺めながら星嵐の手入れをしていた。

「月が綺麗だね」

丹念に丹念に星嵐の刃をチェックしていく。部屋の中でも一通り見たが、星嵐の碧い刃に傷はない。

月の光を反射して幻想的な輝きを放っている。

心無しか、いつもよりその輝きは強いように感じる。

「星嵐ってさ、変わった色の刃してるよね」

当然、返事はない。しかしフェンにとってそれは些細なことだ。星嵐は話するための口がないだけで、ちゃんとフェンと会話をしてくれている。

「いやいや。他の刀より断然綺麗だねって。それに、星嵐の刃を見terると落ち着くんだ」

刃にすーっと指を這わせる。普通の刀であれば、フェンの指は切れ、赤い血を滴らせていただろう。しかし、碧い刃はフェンの指を切ることはなかった。代わりに火傷しそうなほどの熱を指に感じる。フェンは笑った。

「あ、照れてる？ ふふん、このフェン様のたらし技術に恐れを為したな！ あ、痛い痛い。ごめんって。私が悪かったよー」

急に指の皮が切れた。

どうやら星嵐を怒らせてしまったらしい。

さてどうしたものか。星嵐のツンデレっぷりをこのまま堪能するか、それとも星嵐のストレス発散に魔獣退治にでも行くか。

ザッ、ザッ――

「ん……？」

ふと聞こえた奇妙な足音にフェンは星嵐から目と指を離して集中する。

前の支部でクロスベルのことは聞いている。なにが起こってもおかしくない都市だと。

キーン

今度は掠れた音が聞こえた。アルモリカ村の出入口近くからだ。犬特有の息遣い。そして獣臭。

まさか魔獣が村の中に？

フェンは屋根から飛び降りると、すぐさまアルモリカ村の出入口へと向かった。

それはもう、嬉しそうに。

アルモリカ村（後書き）

時間軸は零の第一章からにしました。

ところでエステルとヨシユアっていつ頃来たんでしょう。
やっぱり警備隊からの依頼が来る一日くらい前ですかね？

招かざる犬

魔獣と思われる気配を感じ、アルモニカ村の出入口に向かうと、三匹の黒い犬が農具や食糧庫を荒らしていた。

「ひゃっほーっ！」

「バウッ！」

フェンはまず、食糧庫の犬に跳び蹴りを食らわせる。

ブーツに覆われた足は犬の脇腹に直撃。

犬は数メートル吹き飛ばされ、すぐそばにある木に激突した。

「よっしゃ！ 星嵐！ こいつら三匹で機嫌直してくれるよね！？」

空中でバランスを取り、星嵐に声を掛ける。

星嵐は一瞬だけ輝きを強めた。

機嫌を直してくれる、とのことだ。

そうなればフェンにも気合いが入る。正直、そろそろアルカンシエルの劇を見に行きたいが……恩を売っておくのも悪くない。

時間はまだある。

フェンは着地すると同時に地を強く蹴った。

ようやく立ち上がった犬に体勢を立て直す時間は与えない。さっきの音を聞き付けて他の二匹も集まってきた。

「母さん直伝！ 一ノ太刀、碧の延べ棒！」

勢いを殺さず、刀を横に一閃。

犬の後ろに着地すると、遅れて犬が倒れ込む。

二匹の犬が遅れてやってきた。

フェンは飛び掛かる犬たちの攻撃をひらりひらりと避けつつ、懷からエニグマを取り出す。

戦術導力器。魔法のような現象を起こせるコンパクトな機械で、セツトされた結晶回路を繋ぐラインをなぞると駆動開始する。発動までに多少時間がかかるが、非常に強力だ。

「星嵐、手伝って！ エニグマ駆動」

ガチンツと耳の横へと噛み付いてきた犬をささり避けてその面を殴りつける。

休む暇なくHP3、回避3の嵌め込まれたラインをなぞった。導力器は淡い光を放ち、駆動。内部に充填された導力が外界に干渉する。

本当ならばもう少し時間がかかるのだが、フェンには心強い相棒がいる。

星嵐が輝きを増した。

外界への干渉が途端に終了。

あとは本人の声紋で発動する。

「アイスクリーム！」

「キャンツ！」

気の抜けるようなアイツ名と共に、犬たちの頭上に氷のつぶてが現れ、犬の体を強打。

犬は悲鳴を上げると、敵わないと知ったのか逃げていった。

「ふむ……。おかしいなあ……」

村の外へと走っていく犬を見送りつつ、フェンは鼻の頭を掻いた。

今の犬、妙に煙草臭かったような……。

「んー……ま、あとで村長さんとミシエルさんに報告しとこ。それより今はアルカンシエルだね！ あ、でもアルカンシエルって星嵐と一緒に入れるかな？」

ぶん、と星嵐をふり回しながらクロスベル市へと向かう。
アルカンシエルに入れるか否か。星嵐はぼんやりと光る。

「入れないのは残念だけど仕方ないって？ ノンノン、星嵐は遠慮しすぎだよ。大丈夫、このフェンさんにかければお茶の子さいさい。余裕で入れるよ！ 決めた！ 星嵐と絶対に一緒に入る！」

決意を固め、ニカツと笑うフェン。

月明かりの下、星嵐は嬉しそうに淡く点滅した。

##

アルカンシエルの舞台裏へとアーティストたちが向かった後、新人

のリーシャとニコルは受付の手伝いをしていた。

貴賓席を使う客には支配人のバルサモが接待し、リーシャたちがやる仕事といえばチケットの確認と危険物の持ち込みを丁寧に断るところだ。

リーシャは左側に、ニコルは右側に別れて客からチケットを受け取る。

一ヶ月ほど前から手伝っているため、この作業にも大分慣れた。稽古も何度か失敗しながらも徐々に上達しているのが実感できる。怖いくらい、物事が順調に進んでいた。

二十人目からチケットを受け取っていると、リーシャはニコルの方が何やら騒がしいことに気付く。

「いや、武器の持ち込みは禁止されてるんですって」

「知るかあー。私は星嵐と一緒にアルカンシエルの劇を見るんだー

っ！ 離せチンチクリン！ セクハラだぞ！」

「いや、あの、違いますって！ チンチクリンは余計です！」

どうやら、武器を所持したままアルカンシエル内に入ろうとしている者がいるらしい。

悪意や殺気の類いは感じないが、万が一ということもある。

無理矢理入ろうとしてる点から遊撃士はありえない。彼らの中には個性の強い者もいるが、基本的に民間のルールは守る。

他に武器を所持できる職業は警備隊や軍隊、警察。教会の騎士。はたまた、自分のような裏稼業。

リーシャは警戒しながらニコルのもとへと向かった。

ニコルに詰め寄る、短い紫紺の髪の少女。

「ニコルさん」

「リ、リーシャ」

よほど困っていたのだろう。後輩であるリーシャにニコルは困惑七割、先輩としての威厳保持三割の視線を向けてきた。

「え、と、私に対応しましょうか？」

セクハラ、という単語を聞くに武器を所持したまま劇を鑑賞しようとしている客は自分が女性であることを利用しているようだ。

ならば、同じ女性のリーシャが対応したほうが効率が良い。それに、武器を持っているが故の危険もある。ニコルはリーシャの提案に逡巡し、しばらく考えてから申し訳なさそうに、そして悔しそうに場を譲った。

「ごめん、頼むよりーシャ。僕はチケット回収してるよ」

そそくさと去っていくニコルに「お願いします」と言って、リーシャは武器を所持している客に顔を向けた。
そして予想外の容姿に言葉を失った。

「え……」

「ん？ あれ……」

同じ背丈。同じ髪と瞳の色。容姿。

髪の長さ、胸の大きさ以外、同じだった。

不気味、とは思わなかった。ただ、酷く懐かしい。

「……………お、おねえ、ちゃん？」

驚愕に満ちた声で呼ばれ、リーシャは戸惑う。
知らない。

おねえちゃんって、なに？

なんで同じ顔をしてるの？

なんでこんなに、安心してるの？

ぐちゃぐちゃだった。真っ白で、赤だとか黒だとか黄色だとか、頭の中でぐちゃぐちゃに混ざり合う。

「あ……え……え……？」

目の前の同じ顔の少女が、戸惑うリーシャを見て不安そうに見つめてくる。

どうしたらいいのか、お互いにわからない。

ニコルはリーシャの代わりにチケットの確認をしていて、異変に気づいていない。

観客の話し声がやけに鮮明に聞こえてから、およそ数分。少女は精一杯不安を押し隠して口を開いた。

「も、もしかして、お父さんから聞いて、ない？　じゃ、じゃあさ、公演終わってからお話しよ？　いい、よね？」

「え、あ……う、うん」

戸惑いが消えないまま、リーシャは頷いた。

知らないけど、この子を悲しませたくはないと思ったから。

少女は安心したようにはに cand、S席へと向かっていった。

混乱が収まってから少し経ち、観客が全員席についた頃、リーシャは「あ」と声を上げた。

しまった。失敗した。

「武器、結局持ち込ませちゃった……」

招かざる犬（後書き）

リーシャとの再会の回、とても悩みましたが出しちゃいました。

リーシャはフェンについて何も知りません。多分、突然双子の妹がいるとしたら結構戸惑うんじゃないかなーと思ったので心理描写には素人ながら気を使いました。アドバイスがありましたら、遠慮なくどうぞ！

待ってます！

では、ここまで読んでいただきありがとうございました。

姉と妹

無駄のない筋肉の動き、音楽と絡み合う舞。まばゆい光を放つ舞台を、フェンは感動半分、不安半分に観ていた。

なるほど、確かにアルカンシエルの舞台はこのクロスベルで最高の娯楽だ。

事実、不安なしにこの舞台を観ることができたなら、フェンは思わず立ち上がって魅入っていただろう。

「お姉ちゃん……」

アルカンシエルの出入口で出会った、そっくりな顔をした少女。

彼女が双子の姉であることを裏付けけるものなどないが、それでもフェンには妙な確信があった。

雷が体を貫いたような感覚が、告げたのだ。

この人は間違いなく私のお姉ちゃんだと。

（でも、お姉ちゃんは私のことを知らなかった。それどころか、すっごく戸惑ってた）

双子の妹『なんか』いるわけがない。

同じ紫紺の瞳を持つお姉ちゃんは、フェンを否定していた。いや、恐がっていた。

まるでいけないことをして、その発覚を恐れる子供のように。それが意識的なものなら良い。

でも、お姉ちゃんは無意識に恐れていた。

それが少しだけ、寂しかった。

「はぁ……。なんていうかさー、双子って怖いね」

一目見てしまえば、相手が何を思っているのかすぐにわかってしまう。

お姉ちゃんも、一度落ち着いて思い返せば、フェンが何を思っていたのか曖昧にわかってしまうだろう。

ああ、失敗した。

本当に失敗した。

なんで、私は、真っ先に胸を見て手を伸ばしかけてしまったんだ。これじゃあ姉に会って始めて抱いた感情が嫉妬だって、一番に思ったことが『揉みたい』だってばれてしまうじゃないかっ！

「ううう……。どうしよう。ばれたら第一印象が最低変態な双子妹になっちゃうよあ。星嵐、どうしよう」

半泣きになりながら柄を叩く。

星嵐は柄を熱くし、淡い光を一回だけ放つと沈黙した。

「アルカンシエルの舞台見てるんだから邪魔するな？ ひどい！ 酷すぎるよ！ 誰のおかげで鑑賞できると思ってるのさ！ え、フェンのおかげだってわかってる？ でも相談事は後にしてくれ？ うわああああん！ 星嵐の薄情者おっ！」

後から思えば、それだけアルカンシエルの劇が素晴らしかった。けれど、フェンはこのとき初めて星嵐をどこか遠くに投げてしまいたいと思った。

#

私は、なんでこんなに恐がってるんだろう。

公演が始まり、陽気な音楽が流れている劇場内をリーシャは掃除していた。

綺麗になっていく床と違い、心の中はもやもやしたもので覆われている。

リーシャはじわじわとした恐怖を感じていた。

なにか、なにか取り返しのつかないことをしてしまったかのような

（なんで、そう感じてるんだろ。あの子とは今日初めて会ったはずなのに）

取り返しのつかないことなんて、できるはずもない。
きつと気のせいだ。

リーシャは自分に無理矢理言い聞かせて、劇場内の掃除に専念する。

すべては、公演が終わってからだ。

#

公演が終わってしばらく経った歓楽街は、変わらずにぎやかだ。

アルカンシエルはライトアップされて輝き、昼間とはまた違った荘厳さを感じさせる。

フエンは、広場のベンチに座ってアルカンシエルを眺めていた。

これから長年、顔を合わせることができなかった姉に改めて会い、話すのだと思うと不思議な感慨がある。遊撃士になって共和国中を探し回り、それでも見つからなかった姉。まさか偶然観にきた劇場にいるとは思わなかったが。

おかげで心の準備をする時間がなくて焦りに焦った。

「でも、本当に会えて良かった」

もしかしたら、二度と見つからないんじゃないかと思ったから。

お姉ちゃんにはいろいろと聞きたいことがあるし、お父さんのこともある。

もちろん、私にだって話したいことがある。お母さんとの馬鹿話とか、遊撃士の仕事で体験した面白いこととか。けれど、今は落ち着こう。

話す時間はたっぷりあるのだから。

アルカンシエルの入口がカシヤ、と軽い音を立てて開いた。

その奥からは、受付のお固い緑髪の人。舞台に出てたオレンジ髪の女の人に、金髪の男性、黒髪の男性。歌を歌ってた濃い紫色の髪した女性が出てくる。

そして、最後に共和国でも有名なイリア・プラティエと、控えめになにかを断るお姉ちゃん。

遠くから見る限り、どうやらイリアとお姉ちゃんは仲が良いらしい。耳を澄ませば、会話の内容が聞こえた。

「リーシャ、あんたもしかして好きな人でもできた？」

「なっ、す、好きな男性なんていませんよ！」

唐突なイリアの質問に、その手の話題に免疫がないのかお姉ちゃんは顔を真っ赤にして否定する。

イリアはさらに畳み掛けた。

「あつらあ〜？　じゃあなんであたしのメゾンに来ないのよ」

メゾン……………部屋か！

フェンはカツと目を見開いた。つまり二人は気軽に寝泊まりをするほどの仲良し。

イリア・プラティエ、なんと恐ろしい。

お姉ちゃんと仲良くしたいイチヤつき隊隊長のフェンの中で、イリアが要警戒人物に認定された。

フェンがイリアに対し、憤慨していることなど露知らず。お姉ちゃんは申し訳なさそうに頭を下げる。

「それは、えと大事な用事が……」

「ふうん……ま、良いわ。あとでちゃんと紹介しなさいよ!」

納得いかないが、無理矢理聞き出すのも憚れる。イリアはお姉ちゃんの大事な用事の相手の紹介予定を取り付けると颯爽と去っていった。

「いや、だから違いますって」

闇の中でもなお光を放つイリアの後ろ姿に、お姉ちゃんは呆れ混じりに呟いた。

それから、お姉ちゃんは表情を引き締めるとフェンの方へとまっすぐ向かって来る。

明かりの当たるベンチに座っていたフェンは隣を開けた。しかしお姉ちゃんは警戒しているのか、ベンチには座らず立ったまま口を開く。

「あの、お姉ちゃんって、どういうことですか?」

本能で理解できても、理性は納得しない。

お姉ちゃんはほとんど決められた会話をスタートさせた。フェンも台本を読み上げるように返す。

「そのまんまだよ。お姉ちゃんは、私の双子のお姉ちゃん」

「証拠は、あるんですか」

「んー……顔と直感。あ、あと歳かも! お姉ちゃん何歳? 誕生日は?」

「今年で十七歳になります。誕生日は——」

「うん。私もそうだよ。十七歳で、お姉ちゃんと同じ誕生日」

にぱつとフェンは笑う。

お姉ちゃんはいふう、と一息ついた。それから、尋ねた。
さきほどよりも、真剣な表情で。

「じゃあ、貴女は私について、どれだけ知っているんですか」

賑やかな歓楽街の一角で、沈黙が広がった。

フェンがお姉ちゃんについて知っていることはそれほど多くない。
双子の姉であること。

お父さんの家業を継いでいるだろうこと。

そして、アルカンシエルの関係者であること。

かの有名なイリア・プラティエと仲が良いこと。

多分、それくらい。

あまりにも表面的なことしか知らない。

だからフェンは正直に答えた。

「全然知らないよ。好きな食べ物も、好きな遊びも、色も、私知らない。お姉ちゃんが大事に大事に守ってる秘密も知らないし——
なにより、名前も知らない」

偽りのないまっすぐな答えに、お姉ちゃんはようやく安堵の息をついた。

そうだね。知ってるはずないよね。

そんな類いの安堵。お姉ちゃんの表情が和らいだ。

フェンはその表情を見て唇を尖らせる。

血縁以外は無関係な繋がりであることを確信し、喜ぶお姉ちゃんの様子がかんに障る。

（むう。なんだよー。もう、なんだよおー）

今まで全然会えなかったけど、一応双子なのに。
知らないことにそんな安心しなくていいじゃないか。
悔しい。悔しいからフェンは人差し指をお姉ちゃんの鼻先に突き付
けて叫んだ。

「私の名前はフェン・マオ！好きな食べ物は麻婆豆腐！好きな
遊びは球当て！んで色は星嵐の碧色！お姉ちゃんはっ!？」

「え、ええ!？」

「好きな食べ物!」

「え、と特に――」

「なしは禁止！ついでに敬語も禁止!」

「はう、えと、龍老飯店のお料理……かな」

「好きな遊びは!？」

「……………的当て?」

「なんで疑問形？まあいいや、色!」

「お、オレンジ」

「みかんおいしいよね!。よし、じゃあメインディッシュ!」

フェンは指を下ろし、代わりに手を差し出した。

お姉ちゃんは不思議そうにその手を見て、言葉の続きを待っている。

「お姉ちゃんの、名前は?」

お姉ちゃんは顔を上げてきよんとしている。

かわいいなあ、と思いながらフェンはお姉ちゃんを見る。やがて、
お姉ちゃんはようやく差し出された手の意味がわかったのか、満開
の桜のような笑みを浮かべた。

「リーシャ。リーシャ・マオだよ」

「うん！ これからよろしくね、リーシャお姉ちゃん」

差し出した手が握られた。

初めて握ったお姉ちゃんの手は細くて意外と固い。でも、とても温かかった。

ようやく、姉妹として始まることができ、フェンは腕をつい振り回す。

やってからしまった、と思ったがリーシャお姉ちゃんは合わせて腕を回してくれた。ちょっと恥ずかしそうにしているとところが新鮮だった。

とても、幸せだ――。

（嬉しかった。でも、なんでだろう。後ろ暗い思いが消えない）

その理由を知っているのは、とある日人形と入れ替えられた少女のみ。

姉と妹（後書き）

はい、ここからリーシャさんとフェンの物語は始まります。
ある意味この話しが序章ですね。

いろいろと伏線を残した回でしたが……もうネタは読めたって人は
正解かどうかは内緒、碧の軌跡まで持ち越しということでお願
います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字脱字やここちよっとおかしくない、というところがありました
ら遠慮なくどうぞ。

心待ちにしています。

サボりはいけません

「——と、いうわけです。村に侵入した狼型魔獣は早い段階ですべて追い払ったため、被害はさほど出ていません。と、いうわけで！午後からは好き勝手させてもらいまーすっ！」

ひゃっほーい、と上機嫌にギルドから出ていこうとするフェンの手をミシエルはすかさず掴む。

「ま・ち・な・さ・い。全然報告になってないわよ！　なによ、狼出たんで退治しましたって！？　というわけの前を省略しないでちようだいっ」

今度は逃がさない。

鬼もビクリな形相でフェンを睨みつけるミシエル。オカマなだけに迫力が半端ではない。

しかしフェンはものともせずゆるゆるな態度で切り替えした。だって、私のお母さんの方が怖いし。

「まー、まー、気にしたら負けです。度が過ぎるとハゲますよ。ミシエルさん、B型ですよな？　知ってます？　B型つてつぺんに数本残るハゲ方するんですよ」

「あなたは太雑把過ぎるのよ！　それに、あたしはO型よ！」

あ、やっぱりつぺんに残るのは嫌なんだ。でも残念。

「O型はツルツパゲ」

「ノオーッ！」

あまりの絶望に、ミシエルは頭を抱えた。といっても片手はガツシリとフェンの手首を掴んでいる。ふむ、油断も隙もない。手首を掴む手は力強く、腐っても男なんだなとフェンは思った。

「そうそう、ハゲといえば魔獣が出たのはアルカンシエルの公演が始まりちよっと前です」

「全然話し繋がってないわよっ！」

「めんどくさいのでツツコミはなしでお願いしまっす」

「誰がツツコミを入れさせてるのよ……。はあ、で？ その狼型魔獣はどんな姿をしてたの？ 色は？」

ふざけた空気を一気に真面目なものへと変えるミシエル。その辺はさすが、魔都クロスベルで受付をやっているだけのことはある。

「色は黒。もしくはそれに近い色。数は三匹で、食料庫とか畑を荒らしてたかも」

「なるほど……餌不足で山から降りてきたのかしら」

「いや、それはないと思いますよ」

突然の否定にミシエルは驚いて目を開く。フェンは朝調査した被害の数々を思い出しながら言葉を続けた。

「食料目的にしては畑の野菜に食べられた痕跡はありませんでした。食料庫内の物にしても同様です。それに――」

「それに？」

フェンは考え込み、たどたどしい口調で言う。

「魔獣が入ってくるとき、音が聞こえたんです。キーンって、掠れ

た音が」

「掠れた音？」

「はい。どこかで聞いたことがあるようなー、ないようなー。ううん、思い出したら報告します。以上です」

「……………なるほど、わかったわ。じゃあ、これとこれとこれ、よろしくね」

二枚の紙を渡してからミシエルはフェンの手首から手を放した。

フェンは紙を見てから、うち二枚を返す。

二枚の紙にはそれぞれ、手配魔獣とアルモニカ村の柵の修理と依頼内容が書かれていた。

「昨日、村の人に頼まれたのでやっちゃいました。てなわけでアツデュー。ツルツパゲッ」

「まだふさふさよっ！ 失礼ね！」

「あっはッ」

手さえ離れればこちらのもんだ。

面倒事を押し付けられる前に、フェンは軽い身のこなしでギルドのドアから外へと逃げていく。

##

楽屋で一人精神統一している最中に、窓から入ってきた自分そっくりな顔を持つ少女を見て、リーシャは呆れのあまりため息を吐いた。

「てなわけで、来ちゃいましたアルカンシエル！」

「来ちゃいました、じゃないよフェン。本当にびっくりしたんだからね」

昨夜、初めて会い話した双子の妹。その常識はずれな行動にリーシャはむっとした顔で言う。

誰かが窓に近づく気配は感じていた。

誰か、まではわからなかったため万が一に備えて警戒していたが――困った笑顔を浮かべて「鍵開けて」と窓を叩くフェンを見て、脱力した。びっくりしたというよりも呆れた。

しかし、窓を叩かれてびっくりしないという話もおかしいのであってびっくりしたことを強調。

妹であるフェンはリーシャの内情など露知らず、えへへと照れ笑いしている。

緩みに緩んだ、安心しきったフェンの笑顔がなんだかむず痒い。信頼に満ちた顔がリーシャの調子を狂わせる。

「もう……。そういえば、遊撃士の仕事はどうしたの？ クロスベ

ル支部の人たちはずいぶん多忙みたいだけど……」

「すっぱかしたよー！」

「元気に言うことじゃありません」

ああ、なんでこの子、遊撃士になれたんだろう。

最初に見たときもとても遊撃士とは思えない言動だったし。

正直、フェンから遊撃士であることを聞かされたときには信じられなかった。遊撃士の証である『支える籠手』のエンブレムを見て、ようやく信じたくらいである。

とりあえず、リーシャはフェンの額にデコピンをした。

「あいたっ」

「サボっちゃダメだよ。今度サボったらデコピン二回だからね」

「うっう……お姉ちゃんが冷たい……。いや！　これが愛の鞭ってやつだね！　よっしゃ、どんと来い！」

本当に、どうしたものか。

何をやっても逆効果になりそうな状況に、リーシャは内心ため息を吐いた。

別に、嫌なわけじゃない。

でも遊撃士の仕事をサボり続ける妹をほったらかしにするわけにもいかない。

とにかく、この子だけは真っ当に生きて欲しいのだ。

だから、リーシャは心を鬼にした。

（私には、口でこの子をどうにかできない）

迅速に、かつ正確に。

幸い、今楽屋に近づく人間はいない。

（だから――）

ごめんね、フェン。

私にはこうすることしかできないの。

（思いきり、経絡を突くっ！）

「くはっ……っ」

リーシャは直立の姿勢から、コンマ一秒でフェンの経絡を突いた。あまりの速さにフェンは捉えられず、もろに突きをくらいゆっくりと膝から倒れる。

床に体がつく前にリーシャはフェンの体を支え、持ち上げた。握られた拳がグッジョブと親指だけ上に立っていることについては考えないことにした。

「本当にごめんね、フェン。でも、やっぱりサボりはよくないと思うの」

さらさらとポケットから出した筆と紙で手紙を書き、それをテープでフェンの刀に貼り付ける。

それから、リーシャはフェンの体を窓から外へと優しく寝かせた。

穏やかな寝息を立てているフェンにもう一度だけ謝り、リーシャは楽屋の窓を閉めて、鍵をかける。

時計を見ると、稽古の時間まであと5分もない。

「は、はやくいかないとっ」

リーシャは楽屋から急いで出ていく。

罪悪感がないわけではないが、今は稽古だ。イリアさんを待たせて

は申し訳ない。

#

真っ赤な魔人。地中から突如飛び出したその腕。
特務支援課とフェンの体は紅い紅い手に掴まれていた。ギリギリと
締め付けられる。口から内臓が出そう。痛い痛い痛い痛いイタイイ
タイイタイイタイイタイ

あれ、これ、わたししぬ？

おねえちゃん、おねえちゃんごめん……っ！

「っ！」

とんでもなく嫌な感覚にフェンは飛び起きた。寝ていた場所から素早く離れ、手は星嵐の柄を握る。

アルカンシエルの楽屋の窓。カジノの裏。歓楽街の喧騒にアイスクリームの匂い。

油断なく辺りを見回し、そしてなんの危険もないことを確認するとフェンは気を少しだけ緩める。依然、星嵐の柄は掴んだままだ。

「……星嵐。私の周りに、誰かいた？」

いつものふざけた空気はない。一番危機管理が散漫に見えるフェンだが、その実危機管理能力は母が鍛えたこともありギルドでもピカイチだ。

今、フェンは確かな命の危機を感じた。

険しい声で星嵐に問う。

「……そっか。夢、それも悪夢の類いか」

うなされていたこと、周りには誰もいなかったことを星嵐から聞きフェンはようやく力を抜く。

あれほどの危機感がただの夢とは到底思えなかったが、それでも余計な警戒は神経を疲れさせるだけだ。

「ふう……それにしても、なんで私こんなところに寝て……え？ 私お姉ちゃんに追い出されたの？ ん、手紙があるって……ああ、

「これか」

お姉ちゃんって意外と力あるなあ。私、それなりに体重あるんだけど。

フェンは星嵐の柄に貼られていた紙を剥がして開く。寸前に閉じた。

「うーん。お姉ちゃんの手紙……」　　なんだか魅惑的だね。ああ、どうしよう星嵐！　読むのがもったいないんだけど！」

開いては閉じ、開いては閉じ。

ほぼ無臭だけれど仄かに香る、懐かしさを感じる匂い。紙のかかささとなる音が甘酸っぱい感覚をフェンに味わわせる。

「はあああ。やっぱり家族の匂いって安心する。今度お母さんに手紙送ってもらおうかなあ。味噌の匂いがするんだよね」

あとギルドの緑茶の匂い。

はふーんとゆるっゆるに表情を柔らかくしたフェンは小躍りを始める。

浮かれて手紙も読もうとしないフェンを戒めたのは、やはり星嵐だった。

ほぼ一直線。ちょうどフェンの両目の位置にまばゆい光を放ち目を眩ませる。

「うわっ、眩し！　わかったよ、ちゃんと手紙見るって」

星嵐に急かされ、フェンはゆっくり丁寧に手紙を開く。

筆で書かれた立派な文字。その内容は――

『拝啓、フェン・マ才殿。

遊撃士のお仕事はきちんと、サボらないでやること。休みをもらうときは手続きに乗っ取って。それができない限り、会いません。敬具

リーシャ・マオ』

「……………え」

つまり、遊撃士の依頼をきちんとやらないとお姉ちゃんはフェンに会わない……というよりも話さないということだ。

癒し系の雰囲気醸し出しておきながら、フェンの弱点を的確につくリーシャにフェンは恐れをなした。

そ、それは困る。まだまだ話したいことがあるのだ。というか無視されるのはかなり堪える。

「う、うう、うわぁーんっ！ お姉ちゃんの鬼畜ーっ！」

フェンは電光石火でギルドへと駆け出した。

サボりはいけません（後書き）

うーん。リーシャって家族にたいしてはどんな感じだろう、と思いながら書きました。
多分、ずばりと言って躰はしっかり（あれなんか違う）するんだろうなあと思います。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます！

闇夜の暗闘

「あら、どうしたの依頼が欲しいだなんて。 なにか悪いものでも食べた？」

と驚きつつも依頼書を渡してくれたミシエルにフェンは失礼なと思う。

そりゃあ確かに少しだけサボりは多かったが、驚くほどではない。少なくとも母の現役時代の方が休みは多い。

そう、お母さんほどサボっていない私は結構えらい方だと思う。

大幅に間違えている比較対象を頭に浮かべながら、フェンはマインツ山道を歩いていった。

受け取った依頼は五件。うち、手配魔獣が三件だ。

「らんらんらん。うん！ 滝すごいね星嵐！」

轟音を立てながら上から下へと落ちていく大量の水。透き通った水によって構成されている川と滝をよく見やれば、おいしそうな魚たちが悠々と泳いでいる。

一瞬、雷を落とす魔法スパー^{アーツ}クルを撃ち込んで魚を取ることを考えたが直前で思い留まった。

魚を焼いて食べている時間が今は惜しい。

サクッと依頼を片付けて、早くお姉ちゃんの元に行くんだ！ 欲を言つと頑張ったねー、と褒めてもらいたいし、あ、あと一緒に夜ご飯も食べたい。これは譲れない。

「ようーし！ 星嵐、サクッとモグラ退治しちゃおー」

えいえいおーっと腕を上げてフェンはマインツ山道トンネル道へと入っていった。

#

『黒月貿易公司』

それは港湾区に東方風ビルを構える貿易会社であり、実態はカルバートの東方人街に本拠を置く大陸マフィアである。そのビルの二階、支社長室には三人の人間がいた。

「それでは、今日の夜もお願いしますよ。《銀》殿」

濃い紫髪的青年——支社長ツアオは四角く細長い眼鏡を押し上げつつ、窓の近くに立つ黒衣に覆面の人間に言った。

《銀》と呼ばれた性別年齢共に不明瞭な——大多数の人間には男と判断されている人間は静かに頷く。

『よかるう。ただし、トラックの工作に成功した後、私が相手をするのはルバーチエの主力のみだ』

「ええ、そういう契約ですからね。私個人としてはもう少し協力願いたいところですが」

困ったような顔でツアオは言う。初対面でなにも知らない人間が見れば本当に困っているかのような顔。しかしある程度の付き合いがある人間からすれば、狸だ。

本音は確かに含まれているが、その奥を巧妙に隠している。いや、隙がないというべきか。

絶大な戦力である銀を、どうにか自分の懐に入れたい。それも一つの本音なのは間違いない。

ともかく、将来はどうなるかわからないが、今は雇い雇われの関係。嫌みなくらいに堅実なツアオのことだ。こちらの正体がばれない限り、この関係はそうやすやすと変わらない。

「ああ、そういえば新しい遊撃士がクロスベルに来たらしいですよ」

『知っている。噂によれば、相当鼻のきく奴らしいな。確か——《星狼》だったか』

件の遊撃士の二つ名を口にすると、ツアオは意外そうに目を開いた。

「おや、そこまでご存じでしたか。我々の目論みも大半が《星狼》によって邪魔されています。なので、くれぐれもご注意願いますよ」

確かに注意した方が良くかもしれない。

《星狼》と呼ばれる人物を知っているだけに銀はしかとツアオの忠告を胸に刻み付ける。

あの子は、理論じゃなくて感覚で動く。他の事象に惑わされないから、遠回りしないで一足飛びで真実を見つける。

それこそが、あの子の怖いところだ。

「フン……その言葉、そっくりそのまま返す。では、さらばだ」

心の内を悟られぬよう、銀は感情を込めずに言い捨てて虚空へと消えた。

##

(くそう……)

絶対に騙された。

東クロスベル街道の木の上。空高くで煌々と光を放つ月と星を仰ぎ見ながらフェンは唇を尖らせた。

理由は簡単。もらった依頼の中に一件、夜中にしか出現しない魔獣がいたからだ。

普通ならば回ってこない仕事なのだが、この魔獣、夜中に徘徊しては畑を荒らし回り、果ては街道の石を持っていつてしまうらしい。

なぜ石を持っていくのか、疑問はあるがそれよりも大切なお姉ちゃんと夜ご飯が食べれないことにフェンは怒っていた。

しかも一時間、二時間待っても魔獣は現れない。

「くう、臭いも消えちゃってるから追跡もできないし、何より寒いし！」

半袖短パンは動き易くて良いのだが、防寒機能については皆無。いつもは火属性の身体強化アーツ『フォルテ』を星嵐に弱めに発動してもらって防寒しているのだが――

「夜に活動する魔獣って、だいたい相手の熱で感知するからなあ……。うかつに防寒版『フォルテ』なんか使ったらばれるし……好戦的なやつなら向かってくるのに」

という事情で使えない。

今回の夜型魔獣は相手をなんらかの方法で感知するうえに臆病なやつだと依頼書に注意書きがあった。

フェンの性格に合わない待ち伏せという手段を取っているのも、それが理由。

文句を言ってもしょうがない。

木の上からぼんやりと街道を見ながらフェンは珍しくため息を吐いた。

夜特有の冷たい風が吹き、ざわざわと木々たちを不気味に揺らす。昼と夜とではあまりに違いすぎる光景。

街道の石はどこか冷たい光を放っており、まるで生ける者を拒絶しているかのように見えた。

昼と夜。生と死。

太極図がフェンの頭に浮かぶ。

いつかは母のように強くなりたい。どうすればいいのか、どうすれば強くなれるのか、それはわからない。

でも、この冷たい夜の風景に答えがあるような気がする。

なんとか感じとろうとフェンは感覚を研ぎ澄ませる。その時、星嵐が光を放った。

「……………もしかして、出た？」

ちかつ、と光り星嵐は答える。

「もう少しだったのに」悔しそうに呟きフェンは静かに立ち上がった。

視線にはすでに魔獣の姿が映っている。暗くてよくわからないが、多分蝙蝠型の魔獣だ。

そいつが、必死に石を取り出そうと周りの石を破壊している。あまりにも奇妙な光景。普通、蝙蝠型の魔獣は動物の血液を餌にするものだが……………これはどういうことだろう。

フェンはしばらく魔獣の異様な光景を見守ることにした。

ガツ、ガツ。

ときに体液で溶かし、ときに爪や牙で破壊する。周りの石はどんどん破壊されていく。

一通り壊し終えると、目的の石を取り出して獣道へと入っていく。その後をフェンは気配を絶ち、尾行する。背の高い草を掻き分けていく巨大蝙蝠。それを木の上から追うフェンの疑問は膨らんでいく。

暗闇の中での追跡のため、今は視覚に頼らず聴覚と嗅覚で魔獣の位置を特定している。そこで疑問が生じた。

蝙蝠特有の血の臭いに、なぜかゴムと濃い土の臭いが混ざっている。ようするに、別種類の魔獣の臭いがする。

他の魔獣と争っただけでは、こんなに強く臭いが移ることなどない。だからこそ疑問だった。

追跡しながら考えるが、答えは出ない。

早くお姉ちゃんに会いたいし、依頼自体は魔獣を倒せば終わりなのだが、そんな気分ではなかった。

変な話、この魔獣が悪いやつに思えないのだ。

(うつゝん)

しかし魔獣はなかなか止まらない。自分の感覚には絶対の自信を持っているフェンだが、さすがに今回ばかりは違うか？ と首を傾げた。

しばらくすると開いた場所に出る。

そこにいたものを見て、フェンは目を見開いた。

アースドローム。

地属性のアーツを操る軟体魔獣。

マインツ山道でよく見かける魔獣だが、サイズが二回りほど小さい。ということとは、子供？

(東クロスベル街道にいるのは、迷い込んだってところかな？)

分析はそこまでにして、フェンは蝙蝠の動向を見守る。

蝙蝠は運んできた石を静かにドローメの前に置き、なにがあっても対応できる場所へと移動する。

ドローメは蝙蝠が運んできた石を触手で探り、それから体の下にある口で咀嚼した。

ゴリ、ゴリユ、ガリヤと固い物が砕ける音が暗闇に響き渡る。

やっと状況が見えてきた。

つまり蝙蝠はこのチビドローメのための餌を調達していたのだ。

完全に違う種族である蝙蝠がドローメの世話をするなど、今までで例のないこと。

そもそも、魔獣にこんなことができるなど誰も思わない。

魔獣は危険なもの。

それが人間の常識。

でも、退治しようなんて思わない。むしろ、この光景はとても素晴らしいと思う。

「あー……どうしようか星嵐」

もうバレるとかバレないようにとか関係なかった。

突如響いた人間の声に、蝙蝠はびくりと反応する。やけに人間臭い反応に笑いながら、フェンは木の上から飛び降りた。

柔らかい草に覆われた地面に着地して、一步一步アースドローメに近づいていく。

蝙蝠が威嚇し始めた。その姿に、なんていか、親やってんだなあと思う。

「んーと、とりあえずはじめてまして魔獣諸君、遊撃士のフェン・マオです」

魔獣に言葉って通じるのかな？ 一瞬思ったが蝙蝠のわかりやすい恐怖の表情が不安を打ち払ってくれた。

というか本当に人間臭いな蝙蝠くん。

魔獣が表情を変えるのって初めて見たよ。

さて、それは置いといて。

フェンはポーチの中へと手を突っ込んだ。

「リラックスリラックス。とにかく、今のところ君たちを退治する気はないから楽にしたまえ。というか楽にしなければならサクツといっちゃうぞ。」

人差し指を蝙蝠くんに近づける。蝙蝠くんは相当臆病なようで、ひい！ と短い悲鳴をあげて後ずさる。

『脅しだ！ 完璧脅しだから！ そんなんで落ち着けるかドアホオツ！』

「おお、素晴らしいツツコミ……ってあれ？」

『はっ、し、しまったああああっ！』

蝙蝠くんが喋った……。

蝙蝠くんが喋ったあ！？

いやいやいや、待ってちようだい待ってちようだい。

「お、おおお？ セッセ星嵐、今のは私の幻聴？ 幻聴だよね？

頼むから幻聴だって言ってくれえッ！」

縋るような目で星嵐に話し掛けるフェン。しかし、星嵐は無情にも魔獣が人の言葉を話したことを肯定した。

「と、とにかくね、私が言いたかったのは、ドローメくんには地のセピスが一番良いと思うんだよね」

その後、なんとか落ち着きを取り戻したフェンはドローメの餌についてアドバイスしていた。

ポーチから出した地のセピスをドローメはおいしそうに食べている。

『ほーん。やっぱりそちのが良かったんか』

「うん。大きくなったら地のアーツを使うからね」

『なるほど。アーツってあれだよな、遊撃士ってやつらが使ってる、魔法みたいなやつ』

「そうそう。火とか水の身体強化アーツは防寒耐熱ができて便利でさ——って違う。違うよ！」

私はなに蝙蝠型魔獣と普通に会話してるんだよっ！

本来であれば一方的なやりとりで終わるはずだったのに、なぜかすごく変な方向に事態が飛んでいる。

張本人である蝙蝠は『なにが違うんだ？』と能天気な首を傾げている。

「私は君たちと約束を取り付けてアツデューするつもりだったんだよっ！ とりあえず、私が一日に一回セピス持ってきてやるから、街道の石畳抜き取るのやめろって約束！ OK？」

勢いに任せて言うと、蝙蝠はカクカクと頭を上下に揺らした。

ここからはもうノリだ。

『い、イエスマム』

「声が小さい！」

『イエスマムっ！！』

「よろしい。そんじゃアツデュー」

手を振りながらフェンは素早く木へと飛び上がり、その場を去る。
蝙蝠はそれをポカンと見送ったあと『ええー』と呟いた。

#

月の光が静まり返った石畳を照らす。

東クロスベル街道の分岐点では一台のトラックが走っていた。

闇夜に溶け込む漆黒の装甲。荷台には何があるのか、それはわからない。知ってはいけない。

電灯が照らす石畳をタイヤが無遠慮に踏み抜いていく。その進路を

邪魔する物は当然ない。途中石畳が破壊されているところもなんなく走ったトラックだ。多少の障害は問題ない。

エンジン音を響かせ、トラックは分岐点をクロスベル市方面に曲がった。

影はそれを確認すると、一枚の符を懷から取り出した。

視線の先には、それなりのスピードで走るトラック。その前輪後輪に注目する。

影はトラックが予定の位置に來ると、符を前後のタイヤに投擲した。

「爆雷符」

影が冷たく吐き捨てる。

同時に、タイヤに触れた符が爆発を起こした。炎上するトラック。

煙が天高く登る。

影はそれを無表情に無感動に見つめた。

ゆらゆらと怪しく揺らめく炎。その中に、目的の黒い金属はない。

どういうことだ？

あの情報はガセだったのか？ ならばなぜツアオは依頼を――。

思考を巡らせつつ、影は隠れていた木から降りた。同時に、凄まじい轟音が響く。

「ハッ、避けられたか。なかなかやるみてえだな」

「フン――なるほど、お前が《キリングベア》か。お初にお目にかかる、銀という者だ」

視線を向けると、木に拳を叩きつけたであろう大男が不敵に笑っている。

同時に銀はすべて悟った。

なるほど、私はツアオの予想通りに嵌められたというわけだ。

情報はガセ。あえてツアオが嵌まった理由は、力を改めて見せつけるためだ。黒月の切り札として存在する銀の力を。

本当に食えない人だ。

情報がガセであることを伝えないのは、銀の力を信用してのことだ。余計な考えを持たせないためだ。

銀に与えられた依頼は、ルバーチエの主力——つまりキリングベアの相手。

銀はそれだけを遵守すれば良い。自分一人で十分だ。銀は潜んでいる黒月の構成員に合図を出した。目的の武器はない。ならば、構成員たちの出る幕はない。

「ククツ、しかしこうも上手く罠に掛かってくれるたあ思わなかったぜ」

キリングベアは笑う。明らかに慢心しているが、それでも隙はない。さすが、というべきか。

他にも、元猟兵であろう部下が四人、銀をライフル片手に包囲していく。

銀は包囲が完成する前に、いつもより倍気を込めた爆雷符をキリングベアに一番近い位置にいる部下に投擲した。符は派手な爆発を起こし、部下を吹き飛ばす。煙も大袈裟なくらい出ており、キリングベアの視界を奪う。

「なっ」

符一枚で、あれほどの威力を出せるものなのか？

一瞬の驚き。

銀はその隙を逃さず、邪魔なキリングベアの部下たちを大剣で沈めていく。

もちろん峰打ちだ。

さすがは戦場で鍛えられた元獵兵。立ち直りは早く、初撃は防御された。返しの刃で沈められたが、これは予想よりも早く目を覚ますかもしれない。

「チィ、小細工なんぞ使いやがって」

先ほどの符が見た目を派手にしたただけの目眩ましと気づいたキリングベアが、その名の通り熊のように凶暴な剛腕を振るう。

銀は身を低くして避ける。

シィッ。空気の切れる音。丁度頭があつた場所だ。

力も速さも、正確さも申し分ない。

だが対応できないというほどでもない。銀は身を低くしたまま水平に斬撃を繰り出した。

キリングベアは腹目掛けてきた刃を後ろに半歩動いて回避。休む暇なく腰の入ったパンチが銀に向かう。

銀は斬り払った姿勢からさらに身を捻り空中へと退避。置き土産に、適度な気が込められた真正正銘の爆雷符を置いていく。

コンマ数秒。

符は小規模ながらも人間の腕一本は容易に吹き飛ばす爆発を起こした。

「くそがッ！」

直撃コースの軌道にあつた符。

キリングベアは地面をできる限り強く蹴り、大幅に後退する。

その先の地面に、一枚の符があることにも気付かずに。

符が放つ殺気に気づいたときにはすでに遅かった。

キリングベアにできることといえば、戦場で学んだ戦闘技法でダメージを可能な限り抑えること。

「チイツ、絶倫功！」

気を纏い、腕を交差して爆発を防御する。

キリングベアの体に凄まじい衝撃が走った。特に腕は熱に焼かれ、引き攣るような痛みが断続的にキリングベアを苦しめる。

絶望的なまでの力量差。だがキリングベアが感じたのは恐怖ではなく、怒りでもなく、高揚。

このキリングベアが、遊ばれている。

ルバーチエに引き抜かれてから、誰もキリングベアに敵う者などいなかった。

それがたまらなく嬉しい。

同時に危機感も覚える。

こいつはルバーチエ商会を崩しえるほどの实力がある。

危機。そして高揚。

「はっはははははは！」

まるであの頃のような。戦場を歩き回り、敵を狩っていたあの獵兵時代！

キリングベアはその巨体から信じられないほどのスピードで銀に接近する。

目にも止まらぬ連撃。

銀は猛獣のような拳撃を剣で流していく。

隙を見つけて針を打ち込むが爆発的な気の流れが針を通さない。さすがは元獵兵だ。針が刺さる直前に気を高めている。

拳撃をすり抜け、銀は一気にキリングベアの懐へと入り込み、剣を一閃。胸から腹の肉を断ち切る感覚が腕に伝わる。しかし浅い。

返しの刃で首を斬りつけようとした。瞬間、銀が最も恐れていた事

態が発生する。

「ストップ！」

キリングベアの首を斬り裂こうとした紫暗の刃が、碧い輝きを放つ刃に止められた。

キリングベアはこの好機を逃さず、部下たちを叩き起こして撤退していく。

「あ、ちょいちょい何どっか行こうとしてんのさ！　って聞いてないし！」

闇夜へと消えていくルバーチェたちに声をだんだんと小さくする遊撃士。

思えば、この遊撃士がこんなにも困惑している姿を見るのは初めてかもしれない。

「ああー、もう、ただでさえ頭の許容量突破してるのに……。いや、怪しい格好したお兄さん！　君が着いて来てくれれば万事OKだ！　というわけで一緒にギルドへ行こう！」

「断る、と言ったら？」

腕を掴む手を振り払い、挑発する。

遊撃士はしばし虚空を見上げると、名案でも思い付いたのか手を打った。

「勝負する！　勝ったら着いてきてねっ！　約束」
「……………フン、良かるう。勝てたらの話だな」

お互い、剣を構える。

銀はここで初めて思う。なんで《銀》っていちいち挑発するんだろ
う、と。

おかげで望まない戦いをするはめになった。

「星嵐！ よろしく！」

遊撃士の——フェンの言葉を合図に、深夜の戦いが幕を開ける。

闇夜の暗闘（後書き）

な、難産でした。

なんだかさらにグチャグチャになった気がします。読み難かったら本当にすいません。

次回は銀とフェン、一回目の対決ですね。

蝙蝠くんがなぜ喋るのか、についてはおいおい明らかにしていきたいと思います。

それでは、ここまで読んでくださり本当にありがとうございました！

銀

「爆雷符ッ！」

「碧の流星ッ！」

暗闇の中、銀の放った符とフェンの放った気の斬撃が衝突し、爆発する。

ただでさえ暗く見えにくい視界が煙で遮られ、互いの姿は見えない。しかし、この二人にとってそれは些細な問題だった。

フェンは嗅覚と聴覚で。

銀は気配を察知して。

煙と闇に覆われた空間を駆ける。

フェンは真っ直ぐに銀へ駆け寄ると星嵐で斬りつける。銀はそれを大剣でガード。返しの刃でフェンの肩を狙う。

「おととつと、危なっ」

上段からきた斬撃を横に回避し、フェンは星嵐を下段から斜め上に斬り上げる。

地面を強く蹴り、銀は大きく距離を開けた。

銀が着地すると同時、星嵐が碧い光を放つ。

「よしっ、アイスクリーム！」

フェンが叫ぶ。

瞬間、大量の氷のつぶてが銀を襲った。

「駆動省略かつ！」

話には聞いていたが、間近で見ると本当にありえない。

なんなんだ、あの刀はッ！

銀はフェンに向かって加速し、軽く飛び上がって上段から全体重をかけて大剣を振り下ろす。

ガアンッ――

激しい金属音。火花。

フェンの呻き声が銀の耳に届く。

銀は隙を逃さず、痺れて硬直しているフェンの手首を大剣の峰で打った。

「あっ……」

フェンの意に反して手から滑り落ちる星嵐。銀は星嵐が地面に落ちる前にフェンの手を背中に回し、そのまま地へと押し付ける。

雌雄は完全に決した。

「――ッ。まさか、突っ込んでくるとは思わなかったよコノヤロー」
「フン……なかなかやるかと思えば、まだまだぬるいな」

悔しそうに頬を膨らませるフェンに、銀は不敵な笑み――ではなく柔らかな笑みを浮かべる。

幸い、フェンの視線は地面しか映っておらずその笑みを見た者はいなかったが。

「さきほどの駆動省略、発動は素早かったがその後の硬直が痛いな」
「うっ……今までは気にならなかったけど確かにきついかも……」
いや、ていうか東方人街の魔人さんのスピードが異常なんだよっ！
硬直っていつても一瞬だし。私と魔人さんの距離、軽く十五メートルくらいあったし！」

「フン、その程度の距離などこの銀には無に等しい」

「うー……。そういえば銀さん？　って良い声してるね」

「……………」

突然の話題変換に銀は黙りこんだ。

のんきに話してる私も私だけど、フェン？　今の状況わかってる？

あまりに緊張感のなさすぎる話題に銀は心の底から不安になる。

将来、この子はその緩さから痛い目にあってしまうんじゃない？

今のうちに、危機感を覚えさせたほうが――。

と考える銀をよそにフェンは話題を続ける。

「なんていうか、男なのか女なのかわからない中性的な声で。かつ、耳に残る声？　しかも強いしっ！」

「……………」

なんか、フェンの声に熱がこもってきた気がする。

熱血というか、熱狂というか、間違っても『こ』から始まる二文字のものによる熱では……ないはず。

「くうー！　負けたのは悔しいけど、でも同年代で自分より強い人って初めてかも！」

「……………待て。なぜ同年代と決めつける」

「え？　うーん……………勘？」

やっぱり、この子の勘って怖い。

「……………まあいい。勝負はついた。私はこれにてさらばだ」

「ちよちよちよ、待って待って！　話終わってない！」

「知らん。そもそも《星狼》、お前の話を聞いてやる利など私にはない」

あまり長くいては正体がバレる可能性がある。それだけは絶対に避けなければいけない。

加えて、銀ではなくリーシャ・マオとしての勘が叫ぶのだ。フェンの話の続きを聞いてはいけないと。

銀は素早くフェンの上から退くと、街道の横にある木へと駆け登った。

一本二本と次から次の木へと飛び移る。

そうしていると後ろから大きな声で

「また今度勝負してねーッ！ あと、私はフェン・マオ！ また会えたら私と恋人の関係になつてくださーい！」

フェンが禁断の言葉を口にした。

聞こえない聞こえない。

ああ、もう、次会ったときどういう顔で会えば――。

##

「はあ……」

熱のこもった、まさに恋に悩める乙女といった感じのため息を吐くフェンを前にミシエルは困惑した。一体、昨日の依頼中になにがあったのか。

「ミシエルさん。運命って信じますか？」

元気で型破りなフェンが、シリアスな顔でありえない言葉を口にしていた。

ミシエルはフェンの顔を見て、しばし硬直したあと自分の頬を引っ張る。これが夢でも幻でもないことを確認すると、受付の引き出しから連絡先が書かれているファイルを取り出す。

「……………フェン。宿屋手配してあげるから、今日は休みなさい」
「いいえ！ それはダメですっ！」

通信機に向かうミシエルの肩を、フェンは音速を越えた速さで掴む。その肩を掴む力強さにミシエルは疑問を膨らませた。本当に、昨日なにがあった。

いつもの彼女ならば、喜んで休日をもらっていただろう。それが、なぜ。

毎日多忙なギルドの受付としては嬉しい。だがここまで変わられてはさすがに気にもなる。

「私、次に銀さんと会うまでに強くなりたいとっ！ 今度こそ銀さんに勝利し、交際するんです！ と、いうわけで！ 掲示板にある手配魔獣はすべて私に任せてください！ それでは、アッデュー！」

「ちょ、ちよつと銀ってあんたそれ——」

「銀さんは私のものですから、手出し無用ですよっ！」

ばたん。

凄まじいスピードで掲示板にあった手配魔獣の依頼をメモし、ギルドから出ていった彼女。

人の話を聞かず、嵐のように去っていった彼女を見て、ミシエルは少し安心した。「……なんか、あの子に順応してるわねアタシ」

なんにせよ、積極的に依頼を片付けてくれるのは良いことだ。

これからはリンやエオリアたちの負担も少しは軽くできるだろう。

###

「えーと、東クロスベル街道にウルスラ間道。西クロスベル街道にマインツ山道。アルモニカ古道。まさに東西南北！ あ、でも手配魔獣やる前にお姉ちゃんに会いにいこー！ ゴーゴー」

テンションMAXなフェンは真っ直ぐに旧市街へと向かう。今は早朝で、いくらアルカンシエル勤務でも家にはまだいるはずだ。清らかな空気が流れる東通り。フェンの生まれ故郷である東方人街に似た雰囲気だが、あそこはもっと賑やかで熱い。

あ、そうだ。

あとでお母さんに手紙を出そう。

好きな殿方ができましたって。

なんて返事が来るかな？ からかい混じりの祝福かな？ でも東方人街の魔人さんが相手だから反対するかな。お母さん、変なところで過保護だし。

「星嵐はどう思う？」

『なにがだよ』

「だから、銀さんのこと書いたらお母さん、なんて返事してくれるかな……って……えええ！」

『喋れるようになりました、ブイ！ てか』

やんちゃそうな声が、星嵐から響く。

え、なんで？

確かに今までも意思疎通していたが、明確な言葉ではなかった。それが、今、なぜか明確な言葉と声によって意思疎通している。

しかし、なぜ今さらになって？

『いやさ、ほら、お前昨日喋る魔獣に会っただろ？』

「会ったね。約束したね」

『約束の件はどうでも良いんだよ。とにかく、良いサンプルになったつちゅーわけ。あの魔獣、声帯で喋ってるわけじゃねえんだよ』

星嵐の言葉にフェンは首を傾げる。

「え？　じゃあどうやって喋ってるのさ」

『導力だよどうりょく』

カシャンカシャン、旧市街へと行くための編み目の橋を渡る。しかしその軽やかな音は徹夜開けの頭の清涼剤にはなってくれないようだ。

星嵐が言った単語一つではまったく理解できない。

「……いやいや当たり前みたいに言われても困るし。や、それは置いといて、導力でどうやって？」

『ん、わぁーってやってグオーってやってブーンってやってオボロ
ロロで喋るんだよ』

「感覚的すぎるから！　ていうか最後の完璧なんか吐いてるよね！
？」

『ああん？　お前今ので理解しろよ。んで刀が胃の中の物吐けるわけねえだろアホ』

「無茶言っつなーっ！　そしてアホは余計だよ！」

『アホにアホつつて何が悪い。だいたい、お前恋した相手が——』

口悪いなオイ、とフェンが突っ込みを入れようとすると旧市街の方

から誰かが来る。

カシヤンカシヤンと朝の静かな風景にその足音が溶け込む。

足音はフェンの近くで止まり、そして控えめで澄んだ声が響いた。

「フェン？」

「お姉ちゃん！」

星嵐から視線を外し、リーシャお姉ちゃんを見るとなぜか気まずそうな顔をしていた。

どうしたんだろう、と思いながらもフェンはさきほどのテンションで話しをする。

「いやー、丁度今お姉ちゃんに会いに行こうと思ってたんだ！ お姉ちゃん、今からアルカンシエルに行くところ？」

「う、うん。新作に向けて頑張らないといけないから……」

アルカンシエルの新作！

フェンは思わぬ話題に飛びついた。

「新作？ どんなのどんなの？ お姉ちゃんも出るの？」

「うん。内容はちよっと教えられないけど、出るよ」

おお、これは是非とも応援せねば。

お姉ちゃんの戸惑い顔も、よくよく見れば不安ながらもちよつと嬉しそうだ。

お姉ちゃんが嬉しそうにしているとフェンも嬉しくなる。きっと、すごくすごく努力したんだろうなあ。

「あ、新作の題名は？ 役は、どんな役やるの？」

多分、ファンならすでに把握済みなんだろうなあ。今度から芸能誌でも買おうかな。

「題名は『金の太陽 銀の月』だよ。それで、私は『月の姫』役」
「へえ……。ん？ 銀の月……。ってことは主役、もしくは準主役！？」

前にチケットを回収していたということはお姉ちゃんはまだまだ新人なのだろう。

なのに、初舞台が準主役……。びつくりだ。そしてすごい。

「うん……。準主役。正直、デビューするだけでも早いのに、準主役なんてもらっちゃって……」

「でもそれだけ努力したってことだよ！ すごいよ。大丈夫だよ。私、劇のことなんて全然わかんないけど大丈夫！ お姉ちゃんの成功は片割れであり妹であるフェン・マオが保障します！」

どんどん暗くなっていくお姉ちゃんの背中を叩き喝を入れる。
お姉ちゃんはフェンを眩しそうに見ると柔らかく笑った。

「ありがとう、フェン。あ、そうだ。昨日は外に放り出してごめんね」

「まったくだぜ。ほんと、リーシャの姉貴があそこまでできるなあ、この星嵐さんにもわからなかった。これからは姐御って呼ばせてもらうからよ」

「本当にごめ……。え？」

突然割って入ってきた星嵐に、お姉ちゃんは下げた頭を上げて左右を見回す。それから、まさかとフェンの腰にぶら下がっている星嵐

に目を向ける。

『よう、リーシャの姐御。おっと、あんまり俺を見んな。照れんだろ』

「冗談っぽく言ってるけど、本当に照れてるから勘弁してあげてお姉ちゃん」

刀が突然喋ったら驚くよね。うんうんわかるよその気持ち。

内心で共感しながら、柄を熱くしている星嵐を手でできるだけ隠す。そういえば、星嵐ってどうやって見てるんだろ。目玉らしきものはないし。

「あ、ごめんね」

お姉ちゃんは慌てて視線を逸らす。しかし気になるのか、ちらちらと星嵐を見ていた。

フェンはどこか初々しいお姉ちゃんの行動に胸をほっこりとさせる。

「うん、癒しだ……」

『おいおい。そうだ、リーシャの姐御、時間大丈夫なのか？』

ほわぁ、と頬を緩ませるフェンをたしなめ星嵐は心配げに淡く光る。

「あ、そろそろ行かないと遅刻しちゃうかも……。ありがとうございます、星嵐さん。フェンをよろしくお願いします。それじゃあ、また今度ねフェン」

「うん。あ、今日の夜一緒にご飯食べよう」

みるみる小さくなっていくお姉ちゃんの背中を見送って、フェンは表情を引き締めた。

「よし。今日も頑張って強くなるぞー！」 『今日は、だろ』

銀（後書き）

いろいろ詰め込みすぎた感が……。

とにかく波乱の種と伏線……伏線かな？ はいっちょ前に入れたのでお楽しみいただけたら幸いです。

読みにくかったらすいません。遠慮なくご指摘くださると嬉しいですよ。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。感想、アドバイスともにお待ちしています。

修行ときどき餌やり

アルモニカ古道の休憩所付近にそれはいた。

頑丈な黄色い皮膚に覆われた全身。背中にはセピスらしき宝石が生えており、頭には闘牛のような二本の角が生えている。紫色の爪は鋭く、木の柵程度ならばやすやすと切り裂くだろう。

手配魔獣、セピスデーモン。

それが魔獣の名だ。

「まずは基本、ヒット&アウェイからだね」

『ああ。基礎からしっかりと固めねえと、伝説の凶手にゃあ勝てねえな。見たところ、銀のやつは半端ねえぐらい基礎がなってる』

「だよねえ。ていうか、あの大剣重すぎでしょ。あれ片手って、本当にすごいよね」

街道を我が物顔で歩くセピスデーモンを観察しながら、フェンと星嵐は今後の方針を語り合う。

休憩所があることを良いことに、その椅子に座って。

『単純な腕力つてのもあるんだろうな。で、行くのか？』

「もちろん。あ、それから駆動省略のアイスクリーム。あれって動きながらでも発動できる？」

『ああ。タイミングと座標指定が難しいが、できるぜ』

「よっし！　じゃあ早速実戦だ！」

勢いよく立ち上がり、フェンは星嵐の柄を握りながらセピスデーモ

ンの前に飛び出す。
不意打ちできたが、それはしない。不意打ちで勝ってもなんら意味がないからだ。
星嵐が輝きを増す。

「尋常に勝負！」

完全にセピスデーモンがこちらを認識したのを確認して、フェンは駆け出した。

目標は止まらずアイスクリームを発動。

セピスデーモンの強靱な腕をフェンは加速してやり過ごし、星嵐の刃を抜き放つ。

「碧ののべ棒っ」

セピスデーモンの腕を居合斬りで傷つけ、取り出した刃はそのままにフェンは距離を取る。

しかし距離を取ったからといって足は止まらない。星嵐の刃が輝きを増したのを確認し、フェンは地面を蹴りながら叫ぶ。

「アイスクリームっ！」

氷のつぶてが出現。

しかし氷はセピスデーモンの手前で降り落ちるのみで、一つも当たらない。

『さすがに難しいな。もっかい発動すんぞ』

「了解。でも、連続で発動して大丈夫なの？」

セピスデーモンの斜め後ろから近づき刃を一閃。しようとするど、

グルンツ。

尻尾が鞭のようにしなり、フェンに襲い掛かる。それを見た星嵐は強く輝き、その輝きはフェンの身体をも包みこんだ。

ガードしたが刀もろとも飛ばされたフェン。しかし身体は軽く、腕に痺れもない。

結果、無事に受け身をとったフェンは星嵐の碧い輝きに包み込まれた手を不思議そうに一瞥する。

『星嵐功——ってな感じが』

「なるほど、私がいつも使ってる内功外功の星嵐版だね！」

『いや、厳密には違うんだけどな。ほら、前、熱いのが来るぞ』

「おっとつと」

セピスデーモンが熱い息を吹き掛けてくる。

フェンは『碧の流星』を放って相殺すると、距離を詰めた。

刃を斬り上げてセピスデーモンの腹を切り裂く。

「星嵐つ、駆動省略はっ、どう、なった、の？」

『ん？ もう終わってる……あ、星嵐功使ってるときはできねえわ。省略』

「うそおっ！ 意外な弱点！」

身体を捻り、縦に斬り裂く。十字の傷がセピスデーモンにでき、苦しそうな雄叫びを聞き、フェンはセピスデーモンの懷から転がり出る。

間髪入れずに跳躍し、セピスデーモンの背中に乗る。

「とりあえず、これで終了っ！」

セピスデーモンが暴れる前に、星嵐で背中を深く斬り裂いていく。首元まで斬り裂き終える頃には、セピスデーモンは絶命し、大量のセピスを残して消えた。

#

フエンがセピスデーモンを倒し終えた頃、遊撃士協会クロスベル支部に二人の若い男女が訪れていた。

一人は明るい栗色の髪と赤い瞳を持った、活発そうな少女。

一人は黒髪に琥珀色の瞳を持つ、落ち着いた雰囲気纏う少年。

「ごめんくださーいっ!」

活発そうな少女はイメージ通りに元気な声を上げて、ギルドの中へ

と入って行く。

しかし受付には誰もいない。少女は「あれ？」と首を傾げた。

「こつちよ、上がってきて！」

「あつ、2階？」

「失礼します」

良かった、誰もいないのかと思ったわ。少年の爽やかな声を聞きながら少女は安堵の息をつき2階へと向かう。

階段を上がり終わると手前のテーブルで二人の男性が寛いでいた。一人は間違いなく受付のミシエル。もうひとり――

「こんにちは、ミシエルさん――ってアリオスさん!？」

思わぬ人物に、少女は驚きの声を上げる。少年は驚き、というよりも安堵の表情。

「よかった。丁度いらっしやったんですね」

「フフ、まあ偶然だがな。三ヶ月ぶりになるか……二人とも、よく来てくれた」

これでクロスベル支部もしばらくは安泰だ、というようにアリオスは二人を労った。

ミシエルもとても嬉しそうに呟く。

「ほんと、アナタたちがウチに来てくれるなんてねえ。うんうん、これでやっと、クロスベル支部も安泰だわ。ああ、本当に、やっ
と……」

多大な苦勞と期待が表情に出ているミシエルに、少女は苦笑する。
「どうやら、クロスベル支部は相当忙しいらしい。」

「あはは……買い被りすぎだと思いますけど」

「ご期待に沿えるよう頑張ります」

礼儀正しく言うミシエルはさらに感動したかのように目を潤ませ、
「これよこれ、これが常識なのよねっ」と感激のあまり早口でまくし立てる。

本当に、ミシエルさんに何があったのだろう。

疑問に思いながらも、少女は姿勢を正した。隣の少年もそれに習う。

「——改めまして。正遊撃士、エステル・ブライト」

「ならびにヨシユア・ブライト」

簡単な自己紹介をし、二人は息を揃えて同時に言葉を続ける。

「遊撃士協会・クロスベル支部に正式に所属させていただきます——
——！」

#

「ふう……」

手配魔獣の依頼ばかりがメモされた遊撃士手帳を片手に、フェンは一息つく。

手帳にはアルモニカ古道と東クロスベル街道の手配魔獣の依頼に完了と赤いインクで書かれている。

「いやー、なかなか身になる勝負だったよ。うんうん」

『ま、あんだだけ駆動省略やってりやあ感覚も掴めて当然だろ』

「銀さんに一歩近づけたかな？」

『さて、それはどうだろうな。あっちもまだまだ発展途上っー感じだし。一歩俺らが進んだら、あっちは十歩進んでるなんてーのもあながち間違いじゃねえだろ』

その成長スピードは反則なんじゃ……。いや、ここは私がさらにスピードを出して追いつくしかない！

星嵐の憎まれ口にフェンはさらにやる気を出し、拳を握る。

そう、まずは追いつくのだ。

「よっしゃあ！ じゃあささつと蝙蝠くんたちに餌やって次行ってみよーっ！」

『元気だなあオイ』

ぴょん、と無駄に良い身のこなしで獣道へと入っていくフェンに、星嵐は呆れ気味に呟く。

「それが私、フェン・マオなのです!」

ブイツ。

空中で前転しながらフェンは手をピースの形にする。

その姿に星嵐は再びため息をついた。年寄り臭いぞー、星嵐。

獣道は蝙蝠くんが出入りしていたおかげで草が倒れており、良い具合に道になっていた。

邪魔な草は星嵐で斬り払いながら、フェンは奥を目指す。

「それにしても、獣道って暗いねえ。なんか夕暮れ時みたい」

重なる枝と枝、厚い葉によって獣道には日があまり差さない。そのためか、空気はじめじめと湿っており、木や枯れた枝葉の臭いが濃い。

「まあ、魔獣——特に蝙蝠にゃあ暗い方が都合が良いんだろ。後ろからガブリといく分にはな」

「なるほど。やっぱり蝙蝠って血を吸うんだよね。やばい。私、嫁入り前なのに襲われちゃうかも!」

それはだめだ。銀さんが私の物であるイコール私は銀さんの物でもある。

蝙蝠くんには悪いがこの身体に流れる血一滴足りとも分けられない!

『安心しろ。お前の血はまずくて飲めたもんじゃねえから』

「そこは嘘でもおいしいって言うてよ！　って、星嵐、いつ私の血を吸ったああああっ！」

『あん？　見た感じまずそうたる』

「私の血ってそんなにまずく見えるっ！？」

『ああ、つかもうこれ腐ってんじゃね？　ってくらい』
「ひどっ！」

あんまりな星嵐の言い草に、フェンは目を潤ませた。

冗談を言い合いながら獣道を進んでしばらく、道の先に光が見える。やつのことで見えた終点に、フェンは駆け出す。ジメツとしたところから出て、やっと暖かな太陽の光を浴びることができる。

フェンが獣道を抜ければ、そこはやはり魔獣が二体いた。

チビドローメと、なぜかヒツジンが。

フェンは瞼を閉じ、しばし黙考してから目を開けた。

「……チビドローメくん、君の親的役割を果たしていた蝙蝠くんはどこに行っただのかな？」

なるべく笑顔を保ち、フェンはチビドローメに尋ねる。

チビドローメは二本ある触手でヒツジンを指す。

『お。遊撃士さん』

「……………いやいや、なに何事もなかったかのように挨拶しちゃってんの君」

『ん？　ああ、この姿のこと？』

切迫した声で尋ねるフェンと、のんびりマイペースに答える蝙蝠兼ヒツジンくん。

『いやさ、実はオレって夜は蝙蝠、昼はヒツジンってな具合に姿変わるんだよね。ちなみに草食だから、間違っても退治しないでくれな』

「いやいやいや、意味わかんないから！ あ、説明しなくて良いからね。もう、頭追いつかないしっ！」

『ん。オレも小難しいことはわかんないし。とりあえずチビの餌くれないか』

のほほんとした顔で話すヒツジン。昨夜の怯えなどもうどこかへと消えてしまっている。

なんだろう。

すぐくペットにしたい。

このまま首輪でも付けてしまおうか、と真剣に考えながら、フェンはポーチから地のセピスをいくつか取り出す。

それからヒツジンの小さな手にしっかりとセピスを握らせた。

『どうも。ようし、チビ！ 餌だぞ〜』

ぴょん、ぴょん、と跳ねながらヒツジンはドローメを呼ぶ。ドローメは嬉しそうに触手を動かしながら近づいていく。

家族団欒、といった感じた。

邪魔をしては悪い、と思いフェンは静かに立ち上がりヒツジンに声を掛ける。

「じゃ、私もそれなりに忙しいからそろそろ行くね」

『お、わかった。餌、ありがとな』

二カツ、と笑う謎多きヒツジンくん。魔獣にしては表情豊かで、人間みたいだ。もしかしたら、名前もあったりするのかもしれない。

「いえいえ。じゃ、そのお礼にヒツジんくんの名前教えてよ」

『名前？ そんなんで良いのか？』

あ、やっぱりあるんだ。

「もちろん。非常に興味あるし。あつ、でもでも今の一番の興味は銀さんだから！」

『誰だそれ。ま、いいや。オレの名前はナユタ。これからも餌、頼むな』

「ん、ナユタね、ナユタ。んじゃ、また明日」

ぶらんぶらんと適当に手を振り、フェンは獣道に入っていく。

その顔は、彼女にしては珍しく暗い。

嫌なことを思い出したわけではない。ただ、他人の家族団欒とした空気がフェンは二年前から苦手だった。

いいや、苦手なんじゃない。

苦手じゃなくて、ただ、どうしようもない焦燥が生まれるのだ。

家族団欒を見る度に。

もつと強く。誰よりも強く。お母さんを守って、自分も守れるくらい。

強く、強く、強く、強く強く強く！

『おい、フェン、どうしたんだよ』

心配そうに星嵐が話し掛けてくる。フェンは星嵐の柄をポン、ポン、と一定のリズムで優しく叩き始める。

そうすると、胸の奥から突き上げる焦燥が和らいだ。

「ん、なんでもない。ただ、ちょっと羨ましくなっちゃっただけ」
「……そうか。そういや、あれからギルド住まいになっちゃったもんな。家族団欒とする時間なんてもとと少なかったのが、あんな形でなくなっちゃって」

「それはしょうがないよ。お母さんが死なずに済んだだけでも僥倖。よっし！ 気合い入れて次行ってみよーっ！」

焦燥を打ち払うように腕を高々と上げ、フェンは大声で叫ぶ。

そう、強くなるのだ。

獣道をしっかりとした足取りで歩む。その心には、焦燥ではなく決意。

負けても唯一、焦燥感が生まれなかった——むしろ気持ち良かった
銀さんと交際するためにも。
そして、自分のためにも。

修行ときどき餌やり（後書き）

ちよつと構成が荒くなってきた気がします。

違和感がありましたらアドバイスしてくださいとありがたいです。

そして、第一章から全然動いていないというこの事実。ちよつと愕然としました。

今回はフェンの修業回兼、ちよつとした伏線ですね。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます！

支援課の狼探し（前書き）

【魔獣被害調書】

？アルモリカ村

発生日時 ： 三週間前の夜

場所 ： 集落入口

被害・状況 ： 村長によると、事件が発覚したのは朝。遊撃士の活躍により被害は出入口近くの畑と食料庫二軒のみ。

目撃情報 ： 遊撃士ただし追跡不可（村人 たちは全員、就寝中）

痕跡 ： 畑近くにイヌ科の足跡を発見。周辺地域を搜索するも、同様の痕跡は見当たらず。

支援課の狼探し

特務支援課のリビング。そのテーブルの中央にはさきほど警備隊から配布された書類がある。

狼型魔獣被害調査。

本来警備隊で進められていた案件。狼型魔獣による被害調査書の補完をするのが今回支援課に与えられた任務だ。

「それで、ロイドさん。聞き込みをするとして……まずは何処から行くんですか？」

調査を見終え分析も済ませた。捜査方針も『捜査』の観点から魔獣の『プロフィール』『動機』を調べ、調査を補完するという方向に落ち着き、今はどこから回るかと議論している最中だ。

「そうだな……まずは最初に被害に遭ったアルモリカ村に行ってみよう。一番被害が具体的だし……目撃者もいる。少しでも魔獣の特徴を掴んでおいた方がよさそうだ」

「なるほど……」

ロイドの無理のない方針にエリィは感嘆の声を上げる。反面、ランディとティオは目撃者という言葉に苦い顔で反応する。

「……なあ、この目撃者ってよお、遊撃士なんだろう？」

「……………ああ」

遊撃士のまね事と揶揄される業務をこなしている身としては、目撃者が遊撃士とは複雑だ。

しかし、それ以上に追記されている内容が支援課のメンバーの顔を

苦いものになっている。

「なんで、追跡不可って付け足されてんだよ」

ランディの言いたいことはわかる。痛いほどわかる。

普通、遊撃士はギルドに問い合わせれば話を聞くぐらいはできるはずだ。

間違っても、追跡不可、なんてことにはならない。

すごく、厄介事のおいがした。

「……念のため、遊撃士協会にも寄ったほうがよさそうだな」

「そうですね。話が聞けるかどうかは果てしなく謎ですが」

はあ……。

特務支援課のリビングに、四つのため息が響いた。

##

遊撃士協会の朝は早い。

受付のミシェルは新たにクロスベルに来た新人を加えたシフト表を作り、掲示板に張り出す。

そのシフト表には、当然フェン・マオの名前はない。

そして依頼が張り出されている掲示板には、これまた当然手配魔獣の依頼は一つとしてない。ミシエルとしては大助かりなのだが、フエンとしては手配魔獣の依頼がなくなつて欲求不満らしい。

最近ではギルドの二階に居座るようになり、戦闘関連の依頼が来るのを待っている始末だ。

「おはようございます」

どうやら、今日も二階に居座るつもりらしい。

「おはよう、さて、今日こそは他の依頼を片付けてもらつたよ——
つて坊やたち」

「どうも、失礼します」

顔を上げると、そこにはラフな格好をしたフェンの姿——ではなく特務支援課の面々がいた。
特務支援課。

同じような業務をしているため、遊撃士のライバルといえる存在だが——こちらとしては将来的に遊撃士が関与できない部分をカバーしてくれる存在だ。

もちろん、カバーなどはまだまだ先の話だが。

「どうしたのよ？　こんな朝早くに来るなんてヒマなのかしら？
よかったらこちらの仕事でも回してあげるけど」

わりと本気の冗談を口にする。リーダーであるロイドは慌てて首を振って

「い、いえ。今日はちょっとこちらの遊撃士に伺いたいことがあります」

つい先日、警備隊から聞いたような台詞を言った。
まさか、と思いつつもミシエルは言葉にした。

「狼型魔獣の被害調査のこと？」

「あ、はい。こちらの遊撃士の方が目撃したということなので」

「はあ……やっぱりね」

あまりにも予想通りの答えにミシエルは大きなため息を吐いた。
ロイドたちはそれを見て、苦笑いしている。

「調書には追跡不可、と書かれていましたが……」

遠慮気味に声を上げるティオ。

というか、追跡不可とまで書かれちゃったのね……。

ある意味的を得ている言葉にミシエルは己の不甲斐なさを痛感する。
今度、フェンの扱いについて真剣にカルバートのギルドに問い合わせ
せてみよう。少しは改善するかもしれない。

「ええ……。でも、もう少ししたら来ると思うわよ。相変わらず破
天荒で我が儘だけど、最近は戦闘が絡む依頼なら率先して片付けて
くれるしね」

「それはよかったです」

余計な手間はかからなさそうだ、とティオが安堵の息をつく。
他の支援課メンバーも同様だ。

そうだ、少し忠告でもしておこう。

「それはそうと、あんたたち。そろそろ焦ったほうが良いわよ」

「え……」

「なんだ、そりゃ」

意味がわからない、とばかりに驚きの声をロイドとランディは上げる。

それに答えようとしたとき、ギルドの扉が勢いよく開けられた。

「やつほー！ おはようございますミシエルさん！ 手配魔獣の依頼、来てますかあー！」

「来てないわよ。あと、ドアは静かに開けなさいっていつも言うてるでしょう」

「細かいこと気にしちゃだめだよミシエルさん。前も言ったけど、ツルツパゲになっちゃうよー！ ね、星嵐」

『おうよ。今はふさふさでも、そのうちゴツソリ抜けちまうぜ。ハッハハハ！ 一種のホラーだ』

「あたしがハゲになったら、間違いなくアンタたちのせいよっ！」

来て早々失礼なことを言うフェンと星嵐に、ミシエルは怒鳴る。以前まではフェン一人だったのが、今ではその愛刀である星嵐までもが会話できるようになり、そろそろ一人では処理できなくなってきた。

とにかく、このまま彼女の話に付き合っていては支援課の話ができない。

この子が例の遊撃士よ、とミシエルが言おうとしたとき。ロイドが驚きの声を上げた。

「な、フェン！？」

「おろ？ えーと……そうだ！ 警察のロイドくんたちじゃん。どこかで見たことあるお客さんだなーと思ったんだよね」

「忘れてたのかよ……」

逡巡し、思い出した様子で手を打ったフェンに、ランディが呆れる。
「どうやら、知り合いだったらしい。」

「私としてはフェンさんが遊撃士だったという事実が信じられません。失礼ですがミシエルさん、フェンさんは本当に？」

「ええ、遺憾なことに真正正銘の正遊撃士よ」

「ミシエルさんもテイオちゃんもちょっと酷くない！？ お姉ちゃんもだけど、私ってそんなに遊撃士に見えないかな！？」

「見えないな」

「見えないわね」

「つか、遊撃士ってーより」

「旅人、と言われたほうがしっくりきますね」

「うわああああああん！」

見事なチームワークでの即答。

これにはミシエルも感心する。特に、フェンを落ち込ませるとは……。
なるほど、ちょっと酷いぐらいが彼女と話し合うには丁度良いらしい。

「さて、ミシエルさん。彼女が例の？」

喚くフェンから視線を外し、毅然とした態度でロイドが尋ねる。ミシエルは頷いた。

「ええ、話をするなら二階を使っていいわよ」

「ありがとうございます」

#

「ぶーぶー」

『おいおい、いつまで拗ねてんだよ』

「ぶーぶー」

『おら、支援課の小僧たちが困ってんぞ』

「ぶーぶー？」

『えゝ？ みたいに言うなアホ。豚かお前はっ！』

「ぶーぶーっ！」

『お前のこと今度から豚って呼ぶわ』

「ごめんなさい。調子にのりました！」

『よろしい。んで、小僧ども、何の用だ』

人間と刀による漫才を眺めていた支援課たちは星嵐の声にはっ、と意識を戻す。

これが鶴の一声というやつかー、とフェンは土下座の姿勢のまま、のんきにそんなことを思う。

「あ、ああ。というか、なんで刀が喋ってるんだっ!？」

『ああん？　んなの、導力でだよ。そのティオ嬢ちゃんなら、なんとなくわかんたろ?』

その導力の部分が謎なんだけどねー。

ティオちゃんわかるのか、すごいな。

なんて思いながらフェンは机上に置いた星嵐の横に戦術オーブメントを置く。それから遊撃士手帳を開き、クオーツの配置について考える。

「ええ。原理は理解できます。ただ、刀が意思を持ち導力を扱う、という点に関しては疑問を感じますが」

『はっ、魂が絡む小難しい話はどうだっていいんだよ。無理矢理納得しやがれ。俺は星嵐。それだけだ、簡単だろ?』

ティオちゃんって可愛い声してるなあー。あ、でもでも良い声大賞はもちろん銀さんだ。で、次がお姉ちゃん。

「とにかく、アルモリカ村であつた魔獣被害の件について詳しく聞かせてくれないか」

三つ、二つ、一つ。別れているラインにクオーツをはめ込む。縦から順に風、空、火の縛りがあるせいで強力なアーツが組みづらい。三つのラインの一つ。空、風の次になんのクオーツをはめるか、それが悩みどころだ。

今まではHP3を嵌めていたが……。ううん。

『フェン、一旦クォーツセットすんのやめろ』

「うえ？ 星嵐にお任せするよ」

『俺に備わってる感覚器官は視覚と聴覚だけなんだよ』

「あ、そうなんだ。ううん、仕方ない。よし！ じゃあバンバン質問してくれたまえ！ 特務支援課の諸君！」

あえて尊大にフェンが言うと、ロイドたちは漏れそうになるため息をなんとか押し止め質問していく。

「じゃあ、まず魔獣を目撃したのは何時頃だ？」

「うーん、アルカンシエルの舞台が始まるちよつと前。アルモリ力村から走ったからー……多分、九時ぐらいかな？」

「魔獣の姿は？ 調書によると狼らしいのだけれど」

「狼？ うーん、狼っていうより大型犬って感じ。色は黒かったよ。んで固かった」

ロイドとエリイの質問に、フェンはだんだんと三週間前のことを思い出す。

今思えば、あの日はいろいろあった。

「魔獣を見つけたときの状況は？」

「んー……畑とか、食料庫を荒らしてたかな。そのわりには食料には全然手をつけてなかったけど……あれ？」

おかしいぞ。

「どうしたの？」

「私さ、遊撃士だから魔獣って結構見てるんだよ。んで、共和国は領地がでかいからさ、山も結構あるんだ」

違和感。それを探し当てるために、思い当たることを口にする。

「狼型魔獣も結構見るんだけどさ。あの子たちって、大抵三匹とか四匹で行動するんだよね。畑を荒らすときも、食料庫を荒らすときも」

「まあ、狼つつえば大抵群れだな。狩りにしろ自衛にしろ一匹よりも、三匹でやったほうが効率がいいってのがあんだろ」

「そうそう。でもさ、アルモリカ村に現れた狼型魔獣は違ってた。

三匹っていう群れにも関わらず、一匹で別々に行動してた」

「まるで、ボスは他にいるような行動ですね」

「うん。ティオちゃんの考えは正解だと思う。そして、これは私の勘だけど——狼に指示を出したのは人間だと思う」

そうだ。

なんで気付かなかったんだろう。

「人間だと？」

ランディの顔が一気に陰しくなった。他の三人もランディほどではないが顔を陰しくし、同時に驚いてもいる。

ロイドは驚愕を飲み込み、フェンに尋ねた。

「その勘の、根拠を聞いていいか？」

「もちろん、これから話すつもりだったし。でも、その前にお茶飲んでいいかな？ 喉渇いちゃってさ」

にぱっ、と笑いながらフェンはポーチから水筒を取り出した。一気に崩れた緊張感。

ロイドたちは思わずため息をはく。

「あのなあ……」

「頼むから空気をぶち壊さないでくれ」

男性陣の呆れ混じりの声に、フェンはまあまあと手をぶらぶらさせる。

あゝ緑茶最高。

喉が潤ったところで、フェンは話を再開した。

「人間指示説の根拠、だよ。まず第一に群れで行動せず、あの時間に畑や食料庫を荒らしたこと。まるで、あの時間村の人たちが寝静まるのを知ってたようなタイミングと行動。ま、ここまではまだ有り得るかな」

「確かに、ある程度知能のある魔獣なら有り得るな」

「第二に、畑や食料庫を荒らしただけで食料には一切手をつけていないこと。魔獣に村を荒らすだけのメリットがないよね。そして――第三に、キーンっていう掠れた音」

「掠れた音……ですか？」

「うん。しばらく聞いてなかったから思い出せなかったんだけど、その掠れた音って猟兵团が魔獣を扱うときの笛の音にそっくりなんだよね。誰が、なんのために、魔獣を使ってるのかわからないけど――以上、フェンさんの人間指示説の根拠でした」

ぺこり、と正座のまま綺麗に一礼する。顔を上げると、そこには驚いた、脱帽したとばかりに目を見開く支援課メンバーがいた。

「なんだか、一気に話が進んだわね……」

「正直、フェンからそこまでの話を聞けるとは思わなかったよ」

「見直しました」

「意外だったぜ」

「だから君たちは私をなんだとおもってるのさ！」

さすがに傷つくぞ！

叫ぶと、ギルドの二階が沈黙に包まれた。支援課のメンバーは気まぐすそくに視線を逸らしている。

頼むぜリーダー！

頼んだわよ、ロイド。

ロイドさんならこの状況を看破できると信じています。

期待の眼差しをリーダーへ向ける面々。あーあー、可哀相にロイドくん。

フェンはあえて目を据わらせ、ロイドのことを睨む。

冷や汗を垂れ流し、ロイドは重い口を開いた。

「あ、嵐？」

オイ。

「生き物ですらないじゃんか！ いいよもう、わかったよ！ こうなったら、こうなったらロイドくんたちより先に解決してやる！」

星嵐！」

フェンは星嵐の名を叫ぶと同時にその柄を掴む。星嵐は呼びかけだけでフェンの意を汲み、

『アイアイ。秘技、イタチ風って感じかあ？』

刀身を碧く輝かせ、アーツの駆動を省略。意思を持たせた風を発生させ、ロイドの荷物から調書を盗み出した。

「な、うそだろ!？」

「アーツの予備動作なしの瞬間発動、ありえません」

ロイドの手をすり抜け、調書はフェンの手に渡る。フェンは調書に素早く目を通したあと、それをロイドに投げ渡した。

状況の推移に目を回すロイドたちに、フェンは窓を開けると

「それじゃ、アツデュー。どっちが早く真実に辿り着けるか、勝負だ！」

堂々と宣言した。

支援課の狼探し（後書き）

はい、フェンによる分析回でした。

そして、ロイドくんたちの競争開始回。

予定では協力して解決する予定だったのですが……なぜか敵対？
することに。

むむむ、フェンって意外と見栄っ張りですね。いや、子供っぽいだけか？

さておき、ここまで読んでくださりありがとうございます。

感想、アドバイスがありましたら遠慮なくどうぞ！

タバコといえば？

「ふっふっふー、タバコといえば歓楽街とかだよなー」

特務支援課に勝負を無理矢理取り付け、ギルドの窓から脱出したフエンは歓楽街に来ていた。

「やっぱり有利な点から調べていかないと損そんぐ」

フエンは一つだけ、特務支援課に話さなかったことがある。それは犬から漂ってきたタバコの臭い。

犬の体にこびりつくほどの臭いは日常的に吸わなければつかない。つまり、犬に指示を出している人間は日常的にタバコを吸っており、なおかつ！ 犬の近くで吸うほどの非道な人間。

カジノやホステス、バーなどがある歓楽街ならば見つかるのでは、というわけでフエンは歓楽街にいる。

ついでにお姉ちゃんに会えるとなお良い。

『下心見え見えだなオイ。普通裏通りだろ』

「気にしたら負けだぞ星嵐！ それに、もしかしたら見つかるかもしれないじゃん」

『んな都合の良い話なんざねえよ。お前、お気楽さだけは母を超してるぜ』

「わーいうれしいなー」

棒読みで返答。お気楽言われて嬉しいわけがない。

昼の歓楽街は夜に比べ、人通りが少ない。と言っても、他の地区に比べれば断トツで多いのだが。

フエンは漂う臭いに意識を集中させ、例の犬についていた臭いを探し始める。様々な種類のタバコ臭。数ある臭いから探し当てる。住宅街の近くにあるカジノ。ここから、微妙に、似た臭いがする。でも臭いが薄すぎるし、何より他のタバコの臭いもする。わからない。

あんまり嗅ぎたくない臭いだけあつて、なんだか頭が痛くなってきた。あーくっさ。

「バニーさあ〜ん。ここのカジノってどんな人が来るの〜」

「大人のお兄さんたちよ」

「めっちゃアバウトですね」

無理。もう無理。

ここはダメ元でお姉ちゃんを訪ねてみようか。

いや、でもお姉ちゃんは今、新作の公演に向けて稽古で忙しいだろう。その邪魔だけはしたくない。

「ふっ……うっっ……」

『おいおい、大丈夫かフエン。そのアイス屋で一息いれようぜ』

「いえっさー……。うっ、涙まで出てきた」

嗅覚に集中する、という行為は諸刃の剣だ。犯人の臭いを辿ることができるが、一方でこうして嫌いな臭いをいつも以上の精度で嗅ぐことになる。

アルカンシェル前のアイス屋に辿りつき、フエンは涙を拭って注文した。

「すみません……バニラアイス、一つください……ぐすん」

「だ、大丈夫ですか〜？ バニラアイスですね、すぐにお持ちします〜」

「ありがとうございます……」

お言葉に甘えて、近くにあるベンチに腰掛ける。すると、丁度アルカンシエルのドアが開く音がした。フエンは咄嗟にベンチの影へと隠れる。

「次は第三幕を完成させるわよ。もちろん、アイスを食べてからだけどね。何食べる？ リーシャ」

「ええと、シャーベットにしようと思います」

につくき快活な声と大好きな控えめで澄んだ声。やはり、アルカンシエルから出てきたのは愛しのお姉ちゃんだった。幸い、お姉ちゃんはフエンに気づいていない様子。

「シャーベットね。よし、あたしが奢ったげる」

「いえ、そんな。悪いですよ」

「全然悪くないわよ。あたしが良いって言ってるんだから。ということであ、店員さん！ オレンジシャーベット二つね」

「はい」

バニラアイスをカップに入れながら店員さんは二人の接客をする。新たに注文されたシャーベットはすでにカップに分けられているためバニラアイスのような手間は無い。店員さんにつくきイリアからお金——ミラを貰うとシャーベットを渡した。

「ありがとうございます」

「うっし、はいリーシャ」

「すみません、ありがとございます。でも、お金は返しますね」
「だからいらないわよ。先輩の好意は素直に受け取りなさい。そうしないと」

どうなるんだ、とフェンはイリアとお姉ちゃんをこっそりと盗み見る。

イリアの手が、お姉ちゃんの胸に向かっていた。

「揉むわよ」

「さ、させるかあああああつ！」

すぐさまフェンは立ち上がり、電光石火の勢いでイリアとお姉ちゃんの間に割って入る。

「あら？」

「フェン？」

突然の乱入者に二人は目を瞬かせる。フェンは構わず、イリアを睨みつけた。

「イリア・プラティエっ！ お姉ちゃんの胸を揉むなんてそんなけしからんこと、妹であるこのフェン・マオが許さーんっ！」

「あら……リーシャ、この子は？」

ガアー、と荒ぶるフェンを指差しイリアはリーシャに尋ねる。

リーシャはフェンの腕を掴み、申し訳なさそうにイリアに告げた。

「すみません……私の、双子の妹です」

「やっぱり！？ ホントそっくりねえ。えい」

目を輝かせ、テンションこれ極まりイリアは殺気を撒き散らすフェンに思い切り抱き着いた。

「ふがつ！？」

「イ、イリアさんっ！？」

ぎゅう、とにつくきイリアに抱き着かれ、フェンの思考回路はショート。

え、なにこれ。なんで私、イリアに抱き着かれてんの？
ほわい？

「髪短くて胸がないところ意外はそっくりねえー。背もおんなじぐらいかしら。リーシャよりもちよつと筋肉が足りないわね。うんうん、これはこれでなかなか」

「う、うう、ううううう」

『うおーっ！ マジか。マジかコレ！ フェン、感触は！？ 柔らかさは？ 応答しろ、フェンっ！』

「イリアさん、フェンが目を回してます！」

「あらま」

ぱつ、とフェンから離れるイリア。息も絶え絶えなフェンに、星嵐がしつこく話しかける。

『フェン！ どうだった？ イリアの胸のサイズはっ！？ 俺の見立てではDカップの美乳なんだが、あってるか！』

「あ、あつてると思う。わかんないけどあつてると思う。ちなみにお姉ちゃんのサイズはG、もしくはそれ以上と見た」

『うおおおっ。こりゃ永久保存版だぜ。よし、今のうちにイリアの胸のサイズ、形を——』

「星嵐さん……？」

極寒の冷気を伴った声にフェンは恐る恐る振り向く。
お姉ちゃんが、にっこり笑ってた。
怖い。お姉ちゃんその笑顔怖い。

『り、リーシャの姐御、悪かった。俺が悪かった。すまん。だから、だからその笑顔やめてくれ！ 目が笑ってねえからっ！』

「あら、刀が喋ってるの？ へえゝなかなか面白いじゃない！ フェンちゃん、だっけ？ ちょっと見せてくれない？」

呑気に話しかけてくるイリア。お姉ちゃんの身も凍えるような笑顔など、見えていないかのよう。

いや、これは見えてないのだろう。だって、お姉ちゃん、イリアの後ろにいる。

「フェン」

「ハイ、ナンデショウカ」

「星嵐さん、イリアさんに貸してもらっても……？」

「ドウゾドウゾ。ゴジユウに」

『ちよ、待て。フェン、俺を見捨ててんじゃねえ！ 一心同体だろ俺たち！ まて、まてイリアの姐さん。頼むからリーシャの姐御の元に俺を近づけないでくれ！』

お姉ちゃんの頼みを快く受け入れ、フェンは星嵐をイリアに渡した。イリアは、それをお姉ちゃんと一緒に眺める。

リーシャお姉ちゃんの前で、イリアさんが絡む変態発言は厳禁だね。うん。よくわかったよ。

「へえ、綺麗な色してるわね」

「鞘から出したら危ないですよ、イリアさん。まあ、刀身をぽつきりと折ってしまえば問題ないですけど」

につこり笑顔で言うお姉ちゃん。イリアはそれを冗談ととったのか「そうね、それで新しい衣装に使いましょ！」と笑って言う。

「ちょ、それ困る！」

『やめてくれ！ リーシャの姐御が言うのと冗談に聞こえねえから！ つか冗談だよな？ なあ？』

「ふふ。ええ、ほんの冗談です。星嵐さんはフェンの大事な相棒ですからね」

『だ、だよな。あー、冗談でよかったよかった……』

心の底から星嵐は安堵する。フェンもほっと一息。

あ、バナライスもらってないや。と店員にアイスをもらいに行く。耳だけはイリアたちの会話に集中だ。

「そういえば、今日はどうしたんですか？ ここ最近、フェンは魔獣の依頼ばかりやってるんですよ。今日の朝も、そう聞きましたけど」

『ああ。ま、ちょいとややこしいことになってな。今は各地の魔獣被害事件を追ってたんだ』

「ふうん。遊撃士って大変ね。ねえ、フェンちゃん共々アルカンシエルに入らない？ 見たところ、フェンちゃん筋肉がなかなかしなやかで、素質ありそうだし！ 星嵐くんも話せるから面白いことになると思うんだけど」

『やめとけやめとけ。俺はともかく、フェンは舞台なんざ見るだけで自分でやるほど興味ねえよ。あいつ、あれでも遊撃士ってことに誇り持ってたから』

「そうなんですか？」

『おうよ。よくサボってたけどな。だけど目標は高えぜ。なんせS級遊撃士を目指してんだからな』

「S級……ですか」

「なにになに？ S級ってすごいの？」

『ああ、なんせ大陸に指の数ほどしかいねえ達人だ。『理』に至ったもんばかりで、とんでもなく強え。ま、舞台の世界でいうイリアの姐さんみたいなもんだ』

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね星嵐くん。でも、そのうちリシャも星嵐くんの言う舞台の『理』に来るわよ。何たって、このあたしが見付けた子だからね」

「いえいえ……イリアさんの域まで達するなんてとても」

「まーた謙遜しちゃって！ あたしもまだまだ負けるつもりはないけど、ふふ、あんたがあたしと張り合える日を楽しみにしてるんだから！」

お、やーっとバニラアイスが届いた！

スプーンとアイスを受け取り、フェンはお姉ちゃんたちの会話へと突撃を開始する。

「そつだそつだーっ！ イリアなんか完膚なきまでに叩き潰しちゃえー。というか私が叩き潰してやるっ！」

腕を振り上げて敵意をあらわにしたフェン。しかし片手にはアイスが握られているためどこか滑稽なイメージだ。とりあえず、リーシャはフェンの額にデコピンをお見舞いした。

「あいたっ」

「イリアさんは私の恩人なんだから、ダメだよそういうことしちゃむづ……お姉ちゃんのいけずー」

額を押さえ、頬を膨らませるフェン。リーシャは呆れながらもどこか優しい笑みを浮かべる。

それを見て、イリアは呟いた。

「仲良いわねえ」

『ほんと、最初はぎこちなかったのにな』

「あら、そうなの？」

『ああ、まあ、色々あったのさ。んでーイリアの姐さん。俺の柄の部分に、サインくれねえか』

「オッケー。あ、今ペンない持ってたわ。んー次で良いかしら」

『おう！ もちのろんだぜ！ はは、こりゃ全力でコーティングしないとな。へへへ』

談笑を楽しみ、イリアから星嵐を返してもらったフェンはふと、聞こうと思っていたことを思い出す。

「あ、お姉ちゃん！　とイリア！」

「どうしたの？」

「ん？」

アルカンシエル劇場内へと戻ろうとしていた足を止めて、イリアとお姉ちゃんは振り向いた。

あまり時間をかけてはお姉ちゃんの迷惑になる。だから、単純に質問した。

「この街で、一番あくどい奴、もしくは組織って知ってる？」

「あくどい、って言ったらルバーチエ商会ね」

「です、ね。裏通りでよく見かけるけど……フェン。まさかとは思うけど、そこに行こうなんて、思っていないよね？」

「んー……ちよいと臭い嗅ぐただだよ？」

東方人街にも『黒月』というマフィアが巣くっているため、その辺りの線引きは心得ている。

お姉ちゃんはフェンをジーツと見たあと、嘘偽りないことを確認し

「ならいいんだ。でも、くれぐれも気をつけてね」

「アイアイサー。お姉ちゃんに心配かけたくないしねっ！　それじゃ、練習頑張ってね！　新作ぜーったい見に行くから！」

タバコといえば？（後書き）

はい、アルカンシエル組筆頭の二人との談笑回でした。
おかげであまり話しが進んでいないという……。

次回はウルスラ……かな？

プロット通りに進んだことがないものでちょっとわかりません。
そろそろヨシユエスを出したいんだけど……フェンさん、あっち行
ったりこっち行ったりで。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました。

受けたご恩は……

太陽が地上を照らしているにも関わらず薄暗い裏通り。ネオンが石畳を照らす狭い丁字路でフェンは涙ながらに歓喜の声を上げた。

「ビ、ビンゴオオオオオっ！」

正直、こんなにすぐにヒットするとはフェンも思っていなかった。そうだよな、あってるよね。

もう一度、丁字路の先にある行き止まり。ルバーチエ商会の敷地の方向を嗅ぎわかる。

目的のタバコの臭い。そして、犬特有の獣臭！

「やっぱり、間違いないっ！ あとは最近やつらが訪れているところを探すだけ！」

「んで、民間人を襲いでもしたら、そこを確保！ だな」

民間人に手を出されない限り、遊撃士は動けない。これはお母さんにも口をすっぱくして言われたことだ。

まあ、ノリがあれば大抵うまく行くわよ、とも言われたが。

「ようし、そうと決まればあ……どこいこ？」

『俺はウルスラ病院がいい。ナース服だナース服』

うきうき、と答える星嵐。どうやらフェンがイリアに抱き着かれたときに性欲が目覚めてしまったらしい。

しかし忘れてもらっては困る。

「星嵐……またお姉ちゃんに怒られるよ？ 絶対零度の眼差しで」

『はっ……！ いや、イリアの姐さんが絡まなきゃ大丈夫だ。だからフェン、揉んでいいんだぞ。愛しの姉ちゃんの胸』
「っ！」

いきなりの爆弾発言にフェンは星嵐を叩く。だって言い方がなんか粘っこい！ 厭らしい！

「も、揉まないよ！ お姉ちゃんだもん！」

『けけけ、揉みたいんだろ〜フェン？ 焦ってるのがなによりの証拠だぜ〜？』

くっ、喋れるからって調子に乗って……！

顔を珍しく紅潮させ、フェンは無言で裏通りを通り過ぎる。中央広場へと抜けるとギンギン光る太陽の日差しがフェンたちを照らした。

『フェン〜？ おーい、無視しないでくれよ』

「星嵐のっバーカ！ 私に忍耐力がないって知ってるくせに！ バーカバーカバーカ！ もうすっかり実行しちゃったら星嵐のせいだから！ バーカ！」

『おい、確かに俺が悪かった！ だがなぜわざわざ中央広場で叫ぶ！？』

「そんなの星嵐を羞恥心で殺すために決まってるじゃんかーっ！ 振り回してやるっ！」

ベルトから鞘ごと星嵐を外し、フェンはそれを宣言通り振り回す。そのさまは癪癪を起こした子供そのもので、同時に何を仕出かすかわからない。中央広場のベンチに座っていた老人は慌てて逃げ出し、若い男性はどこかへと走り去っていく。

「ちよっと！ あんたなにやってんのよ！」 「星嵐振り回してるー

っ！」

「元氣良く言うことじゃないわよ！　ほら、危ないからやめなさい！」

茶髪に赤目の少女の言葉に、フェンははっとする。マズイ。ついやってしまった。

もはや遺伝と言ってもいい癖にフェンの顔が真っ青になる。

「わーっ！　やっちゃったあああ！」

『た、叩きつけんなあああああっ！』

「それも危ないわよ！」

ガンッと勢いそのままに星嵐を叩きつける。

幸い、鞘から出ないように星嵐自らがアーツを発動していたため刀身がポロリと出ることはなかった。

止めに入った少女は万が一のときのために長い棒を構えていたが、杞憂に終わって安堵の息をつく。

『ふ、ふふふふざけんなよ！　俺の刃がぼつきり逝ったらどうすんだっ！』

「うつつ……それは、ごめん。でも星嵐がけしかけるからじゃないかー！」

ぶーぶーと唇を尖らせながらフェンは星嵐を拾い、ベルトに納める。顔を上げて広場を見渡せば、数メートル離れた場所で群がる人。野次馬だ。

いやー、本当にやりすぎた。

ポリポリと頬を掻きながら、フェンはどうするか考える。

「はーっ。ミシェルさんからちょっとだけ聞いたけど、本当にとん

でもないわね。武器を振り回しちゃダメよ、フェンちゃん」

「うん、猛省してます……。ん？ ミシエルさんって、もしかして同じ遊撃士？」

「うん！ はじめまして、あたしはエステル・ブライト。んで、あそこに立ってるのがヨシユア・ブライトよ」

エステルは広場の中央、鐘が設置されている場所に佇む少年を指差し紹介する。

少年はそれに気がつき、ゆっくりと歩み寄る。フェンの前までくると、ヨシユアと紹介された少年は微笑みを浮かべた。

「はじめまして、君のことはミシエルさんから聞いてるよ。すごく破天荒な子だってね。まさか武器を振り回すほどとは思わなかったけど」

「面目ないです……」

二回も破天荒と言われ、しかし怒るに怒れない状況にフェンはしょぼん、と頭を下げる。

「ま、まあ次から気をつけてくれれば良いから」

「……………エステルさん」

しんみり、とした空気にエステルは慌ててフェンのことを気遣う。それで解決することじゃないよ、とヨシユアがエステルを見咎めるがしかし、子犬のように落ち込んでいるフェンには強く言えないらしい。

「あ……………」とエステルは気まずそうに声を上げる。さすがにこの

ままの空気ではあまりにも居たたまれないためフェンは口を開いた。

「武器を扱う者はその扱いをよく心得よ。間違っても守るべき市民を怖がらせてはいけない、ですよね……」

「うん。これからは気をつけようね」

フェンの心の内を悟ってかヨシユアは会話に乗ってくれる。

「はい」

十分反省しているため、これ以上なにかを言う必要もないと思ったのだろう。

エステルとヨシユアはその場から離れようと歩き出した。フェンも、自然な動きで付いていく。

「……エステルさんとヨシユアさんって、優しいんですね」

「え?」「へ?」

突然の言葉にエステルとヨシユアは振り向いた。

「今の失態、以前いた支部ではげんこつ十回に一週間のサバイバル訓練ですよ。もしそうなったら勝負に負けてるところでした。ふむ……よし! お礼に今からエステルさんたちが向かう場所の依頼、すべて私が片付けましょう!」

受けた恩はその場で返さねば! というわけでフェンはエステルのポーチから遊撃士手帳を拝借する。

その手帳を最後からパラパラ、と見て元の場所へと返した。

「え、ええ!? そんな悪いわよ!」

「いいえ！ 受けた恩は即返す。それが私の流儀ですので！ それに、何やら探し人がいると拝見しましたが？」
「っ！？」

驚く二人に、フェンは自分の遊撃士手帳を取り出し、とんとんと指で叩いた。

「私も、探し人がいたんです」

フェンの言葉に、二人はしばらくしてから納得した。

「なるほど、手帳の中身だね？」

「はい。お二人の手帳は依頼の脇に別のメモが書かれていましたから」

これはお姉ちゃんを探しているときのフェンの手帳と類似している。そのためフェンはすぐに気付いた。

「私がお二人が受けた依頼を片付けている間に、お二人は探し人の情報を探す。これでどうでしょう。もちろん、報酬はお二人にすべて譲渡します」

「ええ！ さすがにただで報酬をもらうのは……」

「お気になさらず！ さあ、レッツゴーです！」

猛反対するエステルを強引に押し切り、フェンは叫ぶ。
ここで恩を返さねば、いつ返す。

人の話をまったく聞かずに前進するフェン。

その勇ましい姿にヨシユアは小声で、エステルが増えた、と呟いた。

#

フエンがエステルたちへの恩返しを誓った頃、強引に勝負を挑まれた特務支援課はウルスラ間道を歩いていた。

「んにしても、今日はついてねえな」

「本当に。まさかこうもバスに乗れないとは思いませんでした」

アルモリカ村へ向かうバスには乗り遅れ、ウルスラ病院へと向かうバスはなんらかのトラブルに合う。

ここまでバスに恵まれないとなんらかの悪意を感じざるをえないのだが……あいにく、その原因には心当たりがない。

「フエンと勝負することにもなっちゃったからなあ」

「そうね。まさか、あそこまでムキになるとは思わなかったわ」

本当に、今日は面倒なことばかりだ。四人は嘆息し、けれどその足

並みは緩めない。

「ま、美人でオレのストライクど真ん中の看護師さんのためだからな」

「捜査のためだからな？」

目的が捜査から明らかに外れてしまっているランディを窘めるが「わかってるって」と軽い笑顔で返される。

本当だろうな、とロイドはため息をついた。

ランディから視線を外し、ロイドは前方へと視線を向ける。なにかしらのトラブルにあったバスの様子を確認するためにウルスラ間道を歩いているのだが、件のバスはどこにも見当たらない。

エリイも同じことを思ったのか

「バス、ないわね」

と心配そうに呟く。

まさかバスジャックにでもあったのか？

もしそうだとしたら支援課の手には終えない。

本部に連絡を入れるべきか……いや、憶測で物を言うべきではない。ロイドはその可能性だけを頭に入れて、先を警戒しながら歩く。とどうやらロイドの心配は杞憂だったようだ。

危機的状况にあるのは間違いないが、広く円形に広がる道。そこに二体の魔獣に襲われているバスがあった。

「っ！ エリイ！ テイオ！ ランディ！」

「任せてっ！」

「はいっ！」

「ちっ、予想通りかよっ！」

エリイたちも魔獣の存在を目視し、ロイドの呼びかけに答える。各自武器を手に取り、ロイドを先頭にバスへと駆け寄る。バスの入口には運転手がおろおろと魔獣に怯え、どうしようもなく焦っていた。

「大丈夫ですか……！」

焦燥にかられた人間は、なにをするかわからない。ロイドは大声で運転手に声をかけ、ひとまず落ち着かせる。

運転手は藁にも縋る必死さでロイドたちを見た。魔獣たちも突然の乱入者に、体を向ける。

「あ、あんたらは……！？」

「警察の者です！」

「撃退すつから中に入ってくれや！」

ランディの言葉に運転手は従い、すぐにバスの中へと入っていった。バスの扉が閉まる。

「よし、バスを守るぞっ！」

「ええ！」

「おうよ！」

「はいっ！」

ロイドの鼓舞を合図に、エリイは魔獣に銃弾を撃ち込む。銃弾は魔獣の胴体に命中。しかし紫色の毛は厚く、たいしたダメージにはなっていないようだった。

だが、それは大した問題ではない。

ロイドとランディがエリイたち女性陣の前へと出た。

「おりゃあ！」

「はあっ！」

ダメージはなくとも、一瞬怯んだ魔獣。僅かな隙を見逃さず、ロイドとランディはそれぞれの武器を叩きつける。

硬いっ！

長い毛に覆われた腹は硬く、鈍い感触がロイドの腕に伝わる。ランディも、その硬さに眉をひそめた。

「かつてえなオイ！」

「テイオ！」

物理攻撃が効かないならば、アーツで。すでにエニグマを駆動していたテイオが僅かに頷く。

エリイも銃弾を撃ち込むのを止めてエニグマを駆動させた。

ならば、ロイドたち前衛組がすることと言えば、時間稼ぎだ。

振るわれた剛腕をなんとか避けたロイドは、魔獣の目を自分に向けさせるためにトンファーを叩きつける。

ここで、それなりの速さを持つ剛腕を避けたことで、ロイドは安心していった。

だからこそ、気づくのが遅れた。

もう一匹の剛腕が、ロイドの頭目掛けて迫っていた。

「くっ！」

「パワースマッシュ！」

ロイドの頭を潰すべく振るわれた剛腕を阻止したのはランディのハルバード。

導力を衝撃力に変換し、さらに闘気で強化されたハルバードが魔獣の腕の軌道を反らす。

ランディに目で感謝する。

あまりの衝撃に動きを止めた魔獣。間髪入れずに二匹の中間に飛び込む。そして、闘気を解放した。

「はあっ！」

闘気は衝撃波となり、ロイドがトンファーを振るたびに魔獣を襲う。

戦技、アクセルラッシュ。

三回転分、トンファーを振るったロイドはすぐにその場を離れた。

「エアリアル！」

「ダイヤモンドダスト」

エニグマによって集められた導力が、持ち主が選択した現象——アイツを発動する。

氷が魔獣を凍らせ、風の嵐が魔獣の身を切り裂く。

やがて風の嵐と氷が消えると、そこには同様に魔獣も消えていた。周囲を警戒し、魔獣がいないことを確認し四人はようやく武器を降りた。

「ふう……かなり手強かったな」

「そうね……」

ロイドに同意し、エリィは安堵の息を吐いた。

街道にいる魔獣ならば普通に攻撃するだけで倒せてしまう。戦技やアイツを使うのは数が多いときだけだ。

「ずいぶん大きかったけれど、どこから現れたのかしら」

手配魔獣級の大きさに強さ。エリイは険しい表情で疑問を口にする。

「どうやら森林地帯に棲息する種のようにですが……なにかのきつかけで街道に出てしまったのでしょうか」

「ふうん……？ 珍しいこともあるもんだな」

テイオの言葉に、ランディが目を僅かに大きくさせた。

魔獣が縄張りから出るなど普通は滅多にない。

「いったいなにが……？ と首を傾げているとバスの出入口が軽快な機械音をたてて開いた。

「あんたら、よくやってくれた！ いやゝ助かったよ！ 一時はどうなることかと……」

ロイドたちが奮闘するさまを、バスから見ていたのだろう。

運転手が頬を上気させ、感謝の言葉をまくし立てる。元気なその姿を見て、ロイドは微笑む。

大惨事になる前になんとかできて、本当によかった。

「いえ、無事でよかったです。今の魔獣のせいで足止めをくらってたんですね？」

「ああ、そうだけど……」

確認すると運転手は苦笑いする。

「その前に、導力エンジンが故障を起こしちゃったんだ。仕方ないからいったん停車して調べてみようとしたんだが……」

「そこに今の魔獣が現れて、立ち往生する羽目になったのか」

つまり、不幸に不幸が重なったということだろう。

「では、通信器の調子が悪かったのもエンジントラブルが原因ですか？」

「ああ、バスに搭載してる通信器はエンジンから導力を取ってるからな。おっと、こうしちゃられない」

運転手はロイドたちに一言断りを入れると、エンジンが積まれているバスの前方部へ向かう。

「うーん……直せる、か……？」

エンジン部を見て唸る運転手を見て、エリィはロイドに振り向く。

「この様子だと、復旧にはまだかかりそうね。どうするの、ロイド？」

「うーん、いったん街に戻って交通課の人に報告した方がいいか」

ここに来る前のバス停は少ない量の人が並んでいた。その中には、病気を患っている人もいるだろう。

ならば、交通課に知らせて新しいバスを出してもらうなりバス停に並んでいる人になんらかの連絡をしてもらった方が良さそう。

ただし……。

ロイドたちは今まで歩いてきた道を振り返る。所々が苔に侵食されている石畳。けして近い距離にはないクロスベルの街が、その先に見える。

ティオが諦めたように目を伏せた。

「はあ……これも運命ですか」

「ま、面倒だけど、そうするしかねえかもな——おいっ！」

頭を掻いていたランディの顔が、険しいものになる。
「いったいどうしたのだろう？」
ランディの視線の先を見る。

「なっ！」

「ひ、ひいいいっ！？」

さきほどと同じ魔獣が三匹。いつの間にか近付いていたらしく、運転手の後ろにいる。

急いで武器を構えるロイドたち。だが、勝率は絶望的だ。とてもバスを守りきれない。

「そんな……」

「まだいたの……！？」

「さすがにマズイな……おい、ロイド！ 各個撃破に持つてくぞ！ さすがに全部は相手にしてらんねえ！」

「いや……駄目だ！ それだとバスが襲われる可能性がある！」

バスがなかったらそれでも良かっただろう。苦戦はするだろうが、勝てた。

ランディも気付き、舌打ちを打つ。

「ちっ、それもそうか……」

「とにかく、すぐに対処しないと……！」

魔獣は目前。もちろん、こちらが考える時間など与えてはくれない。

「来ます……！」

どうする。バスも守って、なおかつ魔獣を撃退ないし追い払うため

には、どうする！

冷や汗が背中を伝う。

魔獣たちは嘲笑うように近付いてきた。

こうなれば破れかぶれで……！

ロイドが走り出そうとしたとき、その声は響いた。

「第一波！　せーのっ！」

ロイドたちの頭上を飛び越え、碧い刀を携えた少女が魔獣の前に着地。一瞬の時もおかずに地を蹴った。

「碧の風牙っ！」

魔獣に向かって弾丸のような速度で向かっていく紫紺の髪の少女――フェン。フェンは身体を捻り、縦横無尽に魔獣たちの間を駆け、刀を振るう。

一瞬だった。

一瞬で駆け、フェンは魔獣の背後に着地する。それとほぼ同じタイミングで、また誰かがロイドたちの頭上を飛び越える。

二人。

栗色の少女が満身創痍になりながらも立っている魔獣に上空から棒を叩きつける。

黒髪の少年は短剣を両手に持ち、支援課の脇を颯爽と通り抜けて少女の横へと立つ。

「ヨシユア！」

「――ああ！」

呼びかけに力強く答え少年は地を蹴った。目視できない速さで魔獣を斬る。一直線に行く少年の後ろを栗色の少女が続き、魔獣たちを

長い棒で連打。

タイミングを見計らって、連打をやめて闘気を螺旋状に発生させる。闘気の隙間を埋めるように少年が駆け抜け――それは闘気と刃の嵐となった。

「おおー」

感嘆の声が、先発を勤めたフェンの口から漏れる。

嵐は一瞬で止まり、というか爆散しそこには栗色の少女と黒髪の少年が立つのみ。魔獣の姿はない。

「……あ……………」

とんでもない技量に、勝手に声が漏れる。ロイドだけではなく、他のメンバーもそれは同じで感嘆の息を漏らしていた。

「す、すごい……」

「とんでもないです」

呆気にとられたように呟く支援課メンバー。件の二人は魔獣の気配がないことを確認し武器を仕舞う。フェンはすでに星嵐を鞘に納めており、遊撃士手帳になにかを書いていた。

「ふう。何とか間に合ったかな。エステル、フェン、大丈夫かい？」

「うん、あたしは別に」

「私も大丈夫です！ いやー、お二人の入るタイミングを作れて良かったです。良いものも見せてもらっちゃいましたし」

感激の眼差しをエステルとヨシユアに向けるフェン。

礼儀正しい言葉遣いに、ロイドたちは一瞬（誰この人）と思ってし

まった。

『ホントホント。フェン、お前この二人と勝負したら勝てねえんじゃない？』

「む……、いや！　いくら恩人といえどここは譲れないね！　絶対勝つ！　エステルさん、ヨシユアさん！　お暇なとき私と試合をしてください！」

「試合？　もちろん、いいわよ」

負けず嫌いな一面を丸出しにして果たし合いの申し出をするフェンに、エステルは笑顔で頷く。

「私もさっきのフェンちゃんを見て、試合やりたいなーって思ったし」

「エステル」

勝負の日程、場所、ルールまで決めてしまいそうな会話の流れを少年が咎める。エステルと呼ばれた少女は「ごめん、つい……」フェンちゃん、またあとで話し合お」と茶目っ気のある笑顔で謝り、ロイドたちに向き直る。

「えっと、あなたたちがクロスベル警察の人？　南口のところで、交通課の人から話を聞いたんだけど」

「あ、ああ……」

凄まじい技量を見せつけられた後で、ロイドは気後れしながらも答える。

「その、君たちは……それにフェン」

見知った顔と、なんだかすごい人たち。奇妙な組み合わせが、さらにロイドを混乱させる。

当の本人たちはあっけらかんと人好きのする笑顔を浮かべた。

「ヤッホー」

「いきなり現れて混乱させちゃったみたいね」

うん、とりあえずフェン。君は本当に空気をぶち壊するのが得意というか、人を脱力させるのが得意だな。

しかしおかげで緊張も大分薄れた。

栗色の髪をした少女にもそれが伝わったのか。もともと明るかった表情がさらに明るくなる。

「うん、じゃあ改めて自己紹介するわね。初めまして！あたしはエステル。エステル・ブライトよ」

「僕はヨシユアと言います。遊撃士協会・クロスベル支部に正式配属になったばかりです」

ヨシユアの言葉に、フェンが「え！」と驚きの表情を浮かべる。

疑問は湧いたが、それよりも二人の職業の方にロイドの意識が向く。フェンがいるから、まさかとは思ったが――遊撃士か……。

強力な商売敵の出現にロイドは内心ため息をつき、一歩前へと出た。

「自分たちはクロスベル警察、特務支援課に所属する者です。危ないところをありがとう。本当に助かったよ」

「あはは、いいって。あなたたちも結構やりそうだし、余計なお世話になってちよっと思っただけど……」

と、エステルがフェンに目を向ける。フェンはなぜか視線をそらし、吹けない口笛を吹き始める。

『フェンが支援課の連中にプレッシャーかけるチャンスだって走り出してよ。しかも図々しく二人にバックアップ頼みやがって』
「だって勝負相手にプレッシャーをかけないと面白くないじゃないか」。勝負事は相手をプレッシャーで押し潰した方が勝ちって母さん言ってたよ?」

『確かに言ってたなあ……シェンリのやつ』

星嵐に身体があつたのなら、遠い目をしているだろう。それを容易に感じさせるほど、その声は疲れきっていた。

フェンのペースに巻き込まれそうになり、ロイドは咳ばらいをしてなんとか話を続ける。。

「……なにはともあれ、ありがとう。正直、危ない所だったよ。俺はロイド。ロイド・バニングスだ」

エステルとヨシユアに名乗る。ふと、フェンが首を傾げて呟いた。

「バニラアイス?」

フェン、頼むから。頼むから空気を壊さないでくれ。

「初めまして。エリイ・マクダエルです」

「うつす。ランディ・オルランドだ」

「ティオ・プラトーです。……よろしく」

フェンが口を挟む隙を与えず、矢継ぎ早に自己紹介をすませる。

それからは話が一気に進んだ。

エステルたちに『ロイド』と『ティオ』という同名の知り合いがいること。

フェンの今日の夕飯は、お姉ちゃん特製の麻婆豆腐だということ。
ヨシユアが導力バスの修理を申し出て、世間話は終わった。

エステルの話に寄ればヨシユアは飛行艇の操縦もできるらしく、エンジン修理もなんなくできるようだ。

まさしく、さすがは遊撃士と言わざるを得ない有能さ。

エンジン修理でロイドたち特務支援課にできることはなく、またロイドたちが魔獣被害の捜査の途中だということを知らず、先に行くように言ってくれた。

エステルの言葉に甘え、支援課は先に行くことにする。
ところで、

「じゃ、おっさきにどーぞ！ ロイドくんたち！ 捜査頑張ってる。
明日、マインツで会おう！」

とフェンからの激励にどこか嫌な予感を感じたのだが……気のせい、だよな？

受けたご恩は……（後書き）

長くなりそうなので最後ははしりました。

ヨシユエスは今出すか、スルーするかで迷いましたが、やっぱりここかなと。

最初はバス故障イベントがなくなる予定でしたが、ここがなくなっちゃうとロイドくんたちが目も当てられないような結末になってしまいますし。

そして、フェンは子供っぽいですけど礼儀正しいんですよ。特に、恩を受けた人に対しては。

礼儀は知ってるけどあえて使わない。それがフェン。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

麻婆豆腐の夜

「さ」

アルカンシエルの稽古が終わり、旧市街の自宅に帰ってきたリーシヤは夕飯を作っていた。

フライパンに水を注ぎ、煮詰める。沸騰したら麻婆豆腐の味付けをし、一口サイズに切った豆腐を入れる。

作業とともに紡がれる鼻歌は、稽古の音楽のもの。

リーシヤは今、とても上機嫌だった。

「よし、あとは片栗粉を入れるだけ……。喜んでくれるかな？ フエン」

きつと、あの子は喜んでくれるだろう。両手を上げて、高まるテンションのまま早口にまくし立てて。

あ、早食いするかもしれない。

でも、じっくり味わうとか言って一時間ぐらい掛けて食べる可能性もある。

うーん、あの子は突拍子のないことをするからな。

予想ができない。

「……………予想できない、といえばあれには驚いたなあ」

頭に浮かぶのは《銀》として初めてフエンに出会った夜のこと。キリングベアとの戦いを邪魔されたり、フエンと戦うことになったり、そしてなぜかフエンに交際を申し込まれたり。

「はあ……………」

火を止め、片栗粉を入れながらリーシャは憂鬱になる。

もう《銀》としてフェンには会いたくない。でも、あの子は耳と鼻を使って何度も追いかけてきそうだ。どこまでも。

もしそうだったら、《銀》のときはとことん突き放そう。心は痛むが、フェンのためだ。

（『仕事』のときの武器とか服は別の場所に隠したし……この部屋にはいつ入られても大丈夫ね）

初めて会ったあの日以来、フェンはリーシャと一緒に住んでいた。

何もかもが突然で、一番困ったのが《銀》関連のこと。

フェンが来てリーシャが最初に取った行動はもちろん隠蔽。

フェンの母に苦勞させられたのか、先代の銀——つまり父の代から、おいや音に対しての各技術のステルスが格段に上昇していた。おかげで、銀の正体がリーシャであることはバレていない。

……でも、なんだかバレてないせいですごく厄介なことになってるような。

認めたくない現実にはリーシャがため息をついた。瞬間、なんの偶然かドアの前にフェンの気配を感じる。

「たっだいまっ！」

「っ、おかえりー」

なんとも妙なタイミングに、と思いながらもリーシャは元気の良い妹を出迎えた。

##

最早我が家同然となつた旧市街のアパルトメント、ロータスハイツ
二階端のドアを開けると、大好物の麻婆豆腐の匂いが鼻をくすぐる。
あゝ、疲れた体に至福のにおい。

お姉ちゃんのマーボー、お姉ちゃんのマーボー！

「たっだいまー」

「っ、おかえりー」

フエンを出迎えたのは愛しのお姉ちゃんの声。台所からだ。エプロン姿のお姉ちゃんが入口からでも見える。エプロンの色はお姉ちゃんお気に入りの服と同じオレンジ色で、紫紺の髪と瞳によく合っている。

似合っていることは似合っているのだが……オレンジ色ってなんかイリアをイメージしちゃうんだよねー。

台所にいるお姉ちゃんの後ろ姿を一瞥し、フエンは微妙な気分を振り払うかのように部屋の中央にあるイスへと勢いよく座る。それから、ベルトから星嵐を外し、テーブルの上へと置いた。

「今日はちょっと遅かったけど……どうしたの？」

くるとフライパンの上にあるだろう麻婆豆腐を掻き混ぜるお姉ちゃん。

その不思議そうな声色に星嵐が疲れきった親父の声で答えた。

『それがよく、聞いてくれよ姐御。こいつ、街ん中で俺を振り回しやがったんだ』

「ええっ!？」

お姉ちゃんは驚愕の表情を浮かべてフェンを見た。その顔が驚きから徐々に険しいものへと変化していく。
フェンは咄嗟に星嵐へと視線を移し、

「ちよつ、星嵐それ言わない約束!」

余計なことを言う星嵐の口を塞ごうとフェンは動く。しかし——だめだ、星嵐には口がない。

『ま、幸い俺のフォローと新人遊撃士諸君の活躍のおかげで事なきを得たんだ。んで、今日帰りが遅れたのは、止めてくれて罰なしにしてくれた遊撃士のお二人さんに恩返ししてたからだ』

「フェン、ダメだよ武器振り回しちゃ。そのお二人の名前は? あとでお詫びしないと」

「いや、お詫びは私が誠心誠意したから大丈夫っ! だから心配しないで。お姉ちゃんは稽古に集中ーっ!」

「できません。もう、休憩時間になるとフェンが何か仕出かしてないか心配で心配で……」

はあ……とリアルすぎるため息に、フェンは愕然とする。
あり? 私もしかして全然信用されてない?

「星嵐さん、フェンになにかあったらすぐに私に伝えてくださいね？」

『ああ、そして互いの苦労を分かち合おうぜ……！』

「ええ。本当に、今までご苦労様です」

『くつ、刃に染みるその言葉……っ！ 俺の苦労もようやく誰かに分かち合ってもらえるのか……。涙が出てきたぜ』

「二人とも酷くない!？」

「『酷くない』」

まさかのダブル即答！

お姉ちゃん、爽やかな笑顔で星嵐とハモらないで！

あまりの悲しさにフェンはちゃぶ台に似たテーブルに突っ伏す。

『ありや、からかいすぎたかこれ？』

「あはは……みたいですね」

からかったの!？

「ちょっ、いつからさ!」

ガバツとテーブルから顔を上げて涙ながらに叫ぶ。お姉ちゃんは麻婆豆腐を皿に盛りながら答えた。

「休憩時間うんぬんから、かな。フェンの反応が面白かったから、つい」

『わかるぜその気持ち。いゝい反応してくれるんだよな。さっき話した武器振り回し事件も、俺にからかわれたフェンが暴走したのが始まりだぜ』

「そうなんですか？ うゝん、ならこれから徹底的にフェンをからかって耐性をつけさせるしかありませんね」

「反対反対大反たーいっ！ なら私はお姉ちゃんのことからかう！
んで、顔真っ赤にしたお姉ちゃんを堪能してやるーっ！」

わりと本気っぽいお姉ちゃんの表情にフェンは抗議の声を上げた。
煽りに煽った星嵐は「くくく」と忍び笑い。高見の見物と洒落込む。
お姉ちゃんはニコニコと笑いながら、

「じゃあ、麻婆豆腐は私が全部食べちゃおうかな？」

普段の控えめさからは信じられないほど小悪魔な台詞を言った。
うつつ……お姉ちゃんのほうが一枚上手だ。

「それだけは勘弁して……」

「ふふ、冗談だよ。夕飯にしようか」

###

「んー」おいしかったあ……。さすがはお姉ちゃんだよー」

私が作るといつもUマテリアルかねこまんまになっちゃうんだよね
！。

至福の夕飯を綺麗に食べ終えたフェンは食器を台所へと持っていき、
水に浸しスポンジを手に取った。

ご飯が作れない代わりにせめて洗い物だけは任せてほしいとフェン
が頼み、もらった役割だ。

洗剤を一滴だけスポンジに垂らし、よく泡立てる。

「そうかな？」

自信のない声が居間から返ってくる。フェンはゴシゴシと使用済の
食器を丁寧洗いながら興奮気味にお姉ちゃんの料理を褒めた。

「うん！ もう絶品！ 東方人街にあるどのお店よりもおいしかっ
たよ！」

「それは言いすぎだよ」

「でも、それぐらいおいしかった！ 今度はみんなで食べたいなあ」

ふふーんふーん

上機嫌に洗い物を済ませていく。自分がかなりの爆弾を投下したこ
となど露知らず、綺麗になっていく洗い物にフェンはさらに気分を
良くした。

「……そう、だね」

「うんうん。えへへ、小さい頃からの夢だったんだ。お母さんとお
父さん、私とお姉ちゃん、四人でテーブルを囲んで一緒にご飯を食
べるのが。それが半分叶って、フェン・マオは大変ご機嫌なのです

「！」

最後の一枚終わりっ！

あとは乾かすだけとなった食器をそのままに、お姉ちゃんが柔軟体操をしている居間へと行く。

星嵐は導力回復のために睡眠中で、テーブルの真ん中に横たわらせている。

「……そっか」

「お姉ちゃん？」

なんだかしょんぼりとしているお姉ちゃん。不思議に思っただけでお姉ちゃんの顔を覗き込もうとする。

顔が見える直前。急にお姉ちゃんは顔を上げた。

「ところでフェン？ 悪い人を捕まえるのは良いけど、絶対に無茶しちゃうダメだよ？ あと、家に帰るまでは気を抜かないこと」

真剣な眼差しでお母さんみたいなことを言うお姉ちゃんに、フェンは呆気に取られる。

「う？ うん。お姉ちゃん、あのさ——」

「そうだ。明日、マインツで一日中監視してるんだよね？」

「うん、だから明日は夕飯いらないよ。それで——」

「了解。それじゃ、お風呂入ってくるね」

さささ、と会話の途中で入浴の準備を済ませたのか、お姉ちゃんは笑顔でそそくさとお風呂場へと向かっていく。

ことごとく言葉を遮られ、フェンはこくこくと馬鹿みたいに首を振るしかなかった。

「あ、うん」

ドアの奥へと消えていくお姉ちゃんの背中。凛と姿勢の良い背中が、今日ばかりは妙に遠かった。

麻婆豆腐の夜（後書き）

ほのぼののしみり、な回でした。

これからも節目節目で二人の日常、距離感を入れていきたいと思ひます。

さて、ウルスラのときは急ピッチに物語が進んでしまったのでマインツでの狼探しは三話ぐらい……にできたらな、と。

二話ぐらいかな？

とにかく、もうすぐで一章は終わります。いや、長かった……。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました。
感想、指摘がありましたら遠慮なくお願いします。

マインツ山道

太陽が東から昇り始めた早朝。澄んだ空気が山から平地へと流れていくのを感じながら、フェンはマインツ山道を上へと歩いていた。襲ってくる魔獣は星嵐で斬り伏せ、セピスを回収。襲いかかってこない魔獣は放置だ。

「ねー、星嵐。お姉ちゃんってさ、サイズいくつだと思う？」

険しい山道を息を乱さずに歩きながら、フェンは神妙な顔で星嵐に意見を求める。しばらく悩むように沈黙をつくり、星嵐は

『……………G、かF』

と、しっかりと声で答えた。

満足のいく答えだったらしく、フェンは笑顔を浮かべて興奮気味に会話を続ける。

「だよねっ！ いつも一緒にベッドで寝てるとそこが気になっちゃってさ！ うんうん、やっぱりお姉ちゃんはそんぐらいかあ」

揉んでみたいなあ、いやいやそんなけしからんこと、私にはできない。

と口でも心の中でも言いつつ、思考は柔らかさだとか揉み心地だとかを想像し始める。煩惱全開だ。しまいには手を怪しくうごめかす。

『限界は近いな。さうて、いつになったらイイ光景を見られんのかなーっと……ん?』

「どしたの星嵐?」

素つ頓狂な声を上げた星嵐にフェンは視線を向け、立ち止まる。万が一のため、手は星嵐の柄を握る。

『いや、前方にいるヒツジン。あれ、ナユタじゃね?』

「へ? あ、ほんとだ」

星嵐に促されて前方に目を向けると、そこにはやたら人間っぽい不思議魔獣、ヒツジンことナユタがトボトボと歩いていて。毎日餌やりに行っていただけあり、何百匹ヒツジンが集まろうとナユタを見分けられる自信が、フェンにはある。

「あり? でもいつも一緒にいるチビが見当たらないよ?」

『だよな。餌だってお前が毎日やってんだから、足りてないなんてことはねえし……オーイ! ナユタっ!』

疑問を解消するため、星嵐は大声でナユタを呼んだ。

ナユタは俯けていた顔を上げ、左右を見回す。前方にいるフェンに気付くと、小さな足を必死で動かして近寄ってきた。

ぴょん、とタツクルしてきたナユタをフェンは後ろに倒れそうになりながらもキャッチする。

「うおっ、どしたのさナユタ。今日はずいぶんとスキンシップが激しいよ?」

『ふ、うう……フェンーっ! 星嵐ーっ!』

もふもふ、と触り心地最高な白い毛を堪能しながら、フェンはナユ

タに尋ねる。ナユタはぐす、ぐす、とひとしきり泣いてから話し始めた。

涙で潤った上目遣いで、破壊力抜群な顔で。

くっ、ペットにしたいすごくしたい。可愛すぎでしょ君！

先ほどとはまた違った煩惱が湧くのを、フェンは首を振って振り払った。

『ぐすっ、あのな、チビが、チビが』

『チビがどうしたんだよ』

短い手で涙を拭いながら話すナユタ。フェンはポケットから手ぬぐいを取り出し、ナユタに渡す。それから落ち着くように、ポンポンと一定の、ゆったりしたリズムで背中を叩いてやる。

しばらくそうしてやれば、ナユタも落ち着きようやくまともに話せるようになった。

『ごめん。ありがとな、フェン』

「ん、全然いいよ。ノープロブレム！それで、チビがどうしたのさ」

ナユタを抱きしめ、歩きながら尋ねるとナユタはゆっくりと話し始めた。その顔は、人間で言う悲痛なものだ。

『チビが、目を離れた隙にどこかに行っちゃったんだ』

「え？でも、チビはまだ小さいし……すぐに探したんだよね？」

もともと動きの遅いアースドローメ。その子供となれば、もっと遅い。

付き合いが長いだけによくわかる。そして付き合いが長いからこそ、放っておけない。

『探したよ！ でも、どこ探しても見つからなかったんだ。目を離したって言っても、ほんの五分ぐらいだし……岩一枚の距離だし……。誰かが来てたらわかる距離だから、遊撃士とかにやられたわけでもなさそうだし……』

「そうになると、自分からどこかに行っただってことだね。でも、あの獣道はずいぶん五分で出られるほどの距離じゃないし……」

探そうにもいきなり息詰まった。

ナユタの尻尾が、力無く揺れる。地面を蹴る音だけが響き、ひどく耳障りだ。

『…………いや、待てよ。オイ、ナユタ。あの獣道って、実は街道まで遠くなるように作ってねえか？』

突然の星嵐の質問にナユタが顔を上げて、こくこくと頷いた。

『うん。簡単に人間に入って来られないように、長く作ってある。それがどうしたんだ？』

「そっか！ 多分チビは、一番街道に近い、道なき道を通ったんだね！」

『そういうことだ。毎日地のセピスを食ってるチビのことだ。アーツで自分の体を保護することなんざ訳無い。なんでわざわざ外に行こうなんて思ったかはわかんねえがな。で、どうすんだフェン』

「へ？」

どうするもなにも、一緒に探すに決まってるじゃんか。

星嵐の言葉の裏に隠された意図に気付かず、フェンは怪訝な顔をする。星嵐がため息をついた。

『お前な、今オレたちは支援課の小僧たちと勝負してんだろ？
で、お前その勝負はどうすんだよ』

「あ、そっか。んー……背に腹は変えられないし……ロイドくんたちが来たら、勝ち譲ったって言うかぁー」

自分から仕掛けた勝負だけに絶対勝ちたかったが、それよりも大事なナユタに関することだ。選択に迷う必要はない。

『ま、フェンならそうすると思ったぜ』と苦笑混じりに言う星嵐。
話はまとまった。が――

『……いや、フェンたちは勝負をそのまま続けてよ』

ナユタが、話を盛り返す。

自己主張をしない平和主義のナユタが、まとまった話を覆すなどこれが初めて。フェンと星嵐は驚きのあまりナユタを見る。

『その、オレの都合だし……。やっぱり、これ以上お世話になるのも悪いしさ……。さっきは、気が動転してたんだ。忘れてくれ』

「やだ！」

『っーか、お前一人でどうやって探すんだよ』

腕の中でもがくナユタをきつく抱きしめてフェンは大反対する。それに乗る形できた星嵐の鋭いツツコミに、ナユタは「それは……」とまた表情を暗くした。

人の言葉を話せるとはいえ、ナユタは魔獣だ。動ける範囲など限られているし、下手をすれば人に狩られることだってある。

情報だって、どこで集める？

『ふうん……よし、一回落ち着こうぜ。状況整理だ。まず、オレらの目的は特務支援課よりも早く、狼型魔獣の被害事件を解決するこ

とだ。そして、ナユタの目的はチビを見つけること。——ナユタ、お前、チビのことは鼻で追ったのか？」

『もちろん追ったよ。街道に出た途端、においが途切れちゃってさ、それ以上は追えなかった』

真剣な星嵐の声に、ナユタは悔しそうに答えた。

その姿に、フェンは昔の自分を見た。

助けたい。ナユタの助けになりたい。チビを無事に見つけてあげたい。

思いばかりが膨らんでいく。

『なるほど。においの途切れ方は？ 徐々に薄くなって途切れたのか？ 上空に行った感じの途切れ方か？ それとも、突然途切れたのか？』

『突然、途切れた。濃いにおいだったのに、いきなり消えて……全然、全然残ってなかった』

『ふむ……フェン、どう思う』

星嵐の堅い声に、んーと唸る。

とりあえず、可能性だけ言ってみることにした。

「魔獣を狩りにきた人に倒された、か、もしくはトラックとか密閉された場所に閉じ込められて、どこかに運ばれた。この二択かな」
『ま、そんな感じだな。んで、そこで提案だ。ナユタ、チビが見つかるまで俺らと行動しねえか？ 幸い、フェンは馬鹿でかいリュックを持ってるし、これから心当たりのやつらを捕まえにいく』

おお、それは名案だ。

フェンは長らく使用していなかったリュックを取り出し、上部に小さな穴を空ける。リュックに何も入っていないことを確認し、背中に背負った。

『へ……？ ええ！？』

星嵐の予想もしない申し出にナユタがうろたえる。
もう一押し。

『フェンは遊撃士だ。情報なんざ、集めようと思えばいくらでも集められる。安全だって確保されるぜ？』

「うんうん。ナユタとチビのためなら、嫌なお仕事も頑張るよ。あ、でもでも一番はお姉ちゃんとお銀さんだけど！」

『お前は一言余計だ。んで、どうするよ？』

不敵な口調で話す星嵐。ナユタはしばし迷ったあと、ぺこりとお辞儀した。

『よ、よろしく』

##

リュックにナユタを入れ、背負ったフェンは山道の中腹を歩いていった。青や白、など爽やかな色の花が咲いており、花特有の甘く、どこか青臭いにおいが鼻の中へと入ってくる。

崖の遥か遠くには青々とした壮麗な山々が並んでおり、まさに大自然と言ったところだ。

『はあ、相変わらずすごく綺麗な景色だなあー』

「お、ナユタここ通ったことあるの？」

『うん。結構昔に、ツアイトっていう狼と』

リュックの上部に空けた穴から景色を眺めながら、ナユタは思い出を語る。

結構昔、という言葉にナユタの年齢が気になったが知らぬが仏だろ
う。

『ほお……じゃあ、マインツ町には行ったことあんのか？』

『うん、高台からちよつと見たただだよ。七曜石っていうんだっけ？それがたくさん運び出されててさ。すごく綺麗だったなあ』

「へえ、一回見てみたいなあ。銀さんと一緒に。そして、婚約指輪を二人で決めるんだー。あ、でも銀さんを選んでもらってープロポーズしてもらうのも捨て難い……！」

『はいはい、勝手にしろ』

暴走を始めるフェンに、星嵐は適当に頷いた。

フェンの妄想スイッチが入ってしまったようだ。うへへーと間抜けな顔で不気味な声を漏らし始める。

ここまで変わり果てたフェンを初めて見たナユタは戸惑いつつ星嵐に尋ねた。

『星嵐、フェンはなにかの病気にかかっているのか？』

『ああ、恋の病にな』

と星嵐が呆れを滲ませて答えたときだった。

オオ——ンっ！

和やかな空気を突き破るように、狼の遠吠えが道に響き渡る。

「ええ！？　もしかしてもう始まっちゃった？」

『ううん！　これ、オレがさっき話したツアイトの遠吠えだよ。でも、ツアイトが人里に降りてくるなんて……。フェン、あのさ——』

「うん。丁度マインツ町に行く途中のどこからみたいだし、急いで行こっか！　走るから、気をつけてねー！」

リュックを背負い直し、フェンは堅い地面を力強く蹴って走り出す。

ツアイト

オオ———ンッ！

オオ———ンッ！

「うるさっ！」

マインツ山道を一気に駆け登り、トンネル洞の中間へと辿り着いたフェンは反響する狼の遠吠えに耳を塞いだ。普通の人間ならば少し眉をひそめる程度の音量でも、常人の何倍も優れたフェンの聴覚には刺激が強い。

導力灯の仄かな明かりの下、フェンは立ち止まる。ポーチのチャックを開け、耳栓を取り出し、耳へとしっかり装着する。これで、聴覚は普通の人間と同じレベルまで下がった。

コツコツ、とわざと音を立てながら石材で舗装された道の上を歩く。

「うん、これでよし」

耳栓の調子を直に確かめ、フェンは出口に向かって改めて歩き出す。

『んにしても、お前の古い友人はどうしたんだよ。ずいぶん吠えてるみてえだが』

『んー……わからない。ツアイトとはたまに会うぐらいだったし。でも、今の遠吠えは仲間に指示を出してるっていうか、他の誰かに話しかけてる感じがな』

『他の誰か、だと？ ナユタに、じゃなくてか？』

『うん。オレに用があるときは直接来るから』

リュックの中でナユタが忙しく動く。よほど、古い友人に会えるのが楽しみなのだろう。

トンネル洞の出口から吹く新鮮な風にフェンは出口が近いことを悟る。

やっぱり、導力灯の光より太陽の日差しだね。と些かトンネル洞に辟易としていたフェンは機嫌を良くした。

実際、出口は近く、太陽の光がトンネル洞に入り込んできているのをフェンは視界に認めた。

「娑婆の空気じゃあああつー！」

トンネル洞を抜け、元の荒涼とした道へ足をつけたフェンは太陽に向かって叫んだ。

太陽の日差しはフェンの体を余すことなく照らし、暖める。

導力灯にはない温もりに目を細め、フェンは視線を空から地上に戻す。

目の前に、狼がいた。

青と白の毛並みを持ち、悠然とフェンを見据える瞳には明確な意思がある。その立ち姿は威風堂々としており、威厳すら感じる。

『ツアイト！ 久しぶり！』
「……ガウツ」

リュックから顔を出し、片手を上げて挨拶するナユタに短く狼――ツアイトは返事をした。

『グルルル。ガウっ』

『相変わらず能天気なやつだ？ 会って最初の言葉がそんな……ツアイト、もつと優しくなかったっけ？』

『ガウガウっ』

『お前の気のせいだ、ってツアイトひどいよー。会ったとき、オレに良い住家教えてくれたじゃないか』

『ガウッ』

『お前が勝手に着いてきたのだろう？ うう、それはー確かにちょっと心細かったから着いて行っちゃったけど……』

ツアイトと言葉を交わすことに小さくなっていくナユタ。傍から見れば、狼に食われる寸前の羊だ。

ナユタをリュックに入れ、保護している自分はさながら羊を操る羊飼いだと言ったところか。犬が居たら、より完璧。

「そう考えると、羊と狼が仲良しって面白いよね」

『確かに。友人っつーより、ナユタは非常食って感じたな』

「『ぶ、あっははははははははは！』」

だよね、と二人で笑う。あまりにも的を得すぎていて、笑いがとまらない。

お腹がよじれそう。

『ちよっ、二人とも酷いよ！』

バシバシと短い手を必死に振り回してナユタはフェンの頭を叩く。しかし、手を伸ばすのに必死なおかげで、全然痛くない。

「ガウ？」

『あ、うん。新しくできた友達なんだ。人間のほうがフェンで、刀のほうが星嵐！』

多分、フェンたちとの関係を聞かれたのだろう。ナユタは嬉しそうな顔でフェンたちを紹介した。

グウ、と珍しいものを見たかのようにツアイトが唸る。

それと同時に、後ろから足音が四つ聞こえた。ナユタは急いでリュックの中に身を隠し、ツアイトは視線をフェンの後ろ姿に向けた。フェンも、同様に振り返る。

「あつ……」

「お！ ヤッホー、ロイドくん」

そこには、トンネル洞を背に、特務支援課の面々がいた。

「フェンさん……！？」

「なんでその狼と一緒にいんだよっ！」

まさかフェンがマインツ山道にいるとは思わなかったのか、エリイとランディが驚愕の声で問い掛ける。

ふむむ、どう答えたものか。

今後のことを考えると、下手にナユタのことは言えない。

脳をフル回転させ、うまい言い訳を考える。その結果

「狼さんと友達になつてた！」

どうだ！ この完璧な言い訳！

無駄に仁王立ちしてまで言った台詞に、ロイドを筆頭とした特務支

援課が一斉に沈黙した。

『お前にまともな言い訳を期待した俺がバカだった……！』

胡散臭いものでも見るかのような視線に、星嵐は後悔が含まれた声で言い放つ。

酷い、一生懸命考えたのに……。

「はぁ……とりあえず」

妙な空気を変えようと、ロイドがため息を吐き、武器を構えた。突然のロイドの行動に、フェンは目を見開く。よくよく見てみれば、ランディもハルバードを構えていた。

不穏な空気。無機質な岩肌がさらに緊張感を煽る。

厳しい声でエリイが確認するように言った。

「白い毛並み……《神狼》の伝承の通りね」

「へっ、ようやく会えたな！　ここで会ったが百年目だ！　とつとと成敗して——って、フェンちゃん！？」

星嵐を鞘から抜き放ったフェンに、ランディが驚く。

敵意を剥き出しにするロイドたち。このままではナユタの友達であるツアイトが退治されてしまうかもしれない。

それはダメだ。

ナユタは彼のことを大事に思っている。

「悪いね、ランディさん。ツア——この狼さんは、私の友達の友達なんだ。退治されると困るんだよね！」

体内の気を研ぎ澄ませる。

四人を相手に手加減などしてられない。特に、ランディの戦闘力は侮れない。彼から伝わってくる気は、荒々しく、それでいて洗練されている。

多分、ハルバードは最近使い始めたものだ。気の練度に比べ、慣れがそれほど感じられない。

高まっていく気。それを静めたのは、ティオだった。

「落ち着いてください、ランディさん、フェンさん」

鈴を転がしたような凜とした声が山道に響く。

「ティオ助？」

「その子……最初から敵意を発していません」

自信に満ちたティオの思わぬ言葉に、ロイドたちは呆気にとられる。

「お、わかるんだ」とフェンはあからさまに安堵した。

ティオはそれぞれの反応をする面々を無視して、狼の前へと出る。

彼女の危険すぎる行動にロイドたちは制止の声を上げる。

「お、おい……」

「馬鹿、何やってやがる!？」

「大丈夫です。もし襲い掛かるつもりなら、すでにフェンさんは食べられています」

「さりげなく酷いこと言うよね!? ティオちゃん!」

「……………」

「それもそうか、みたいな顔で考え込み始めないでよロイドくん! 君たち私に酷くない?」

「……フェン、悪い。ちょっと静かにしててくれ」

あっさり封殺され、フェンはうつうつ……と落ちていた枝を拾って地面に『の』の字を書く。

「やっと会えましたね」

なんか、遠距離恋愛してる恋人みたいな台詞だね、ティオちゃん。そしてナユタ。君だけだよ、私を慰めてくれるのは。

ぼんぼん、と優しく背中を叩いてくれるナユタを今すぐに抱きしめたいくらいだ。

「わたしたちに会いに来てくれたみたいですが……何か伝えたい事でもあるんですか？」

「ウルウ……」

「そう……やっぱり」

お？ ティオちゃん、ツアイトさんの言葉わかるの？

エリイもフェンと同じことを思ったのか、驚きの声を上げた。

「ティ、ティオちゃん!？」

「言葉が、分かるのか!？」

ロイドの問いに、ティオは振り向かずには頷いた。

「はい。言ってることが何となく分かる、という程度ですが……それで、何を伝えたいの？」

「グルルルル……ウルウ………グルルルルウ………」

「え……それって……」

うーん、何を話してるのか全然わからない。

ナユタに小声で何を話していたか聞こうとした瞬間、ツアイトは崖

を駆け登って行ってしまう。

フェンは慌てて、大声で尋ねた。

「狼さんっ！ ナユタが、面倒みてた、チビについて！ なにか知ってますかーっ！」

「ウオンっ！」

「知らぬ、だって」

「ありやりや、もしかしたらって思ったんだけど」

期待していただけに、フェンは肩を落とした。

##

テイオの活躍で、狼——ツアイトがもたらした情報により支援課側はある程度、整理がついたみたいだ。

『最後の欠片はこの先に。後はお前たち次第だ』

ツアイトによると支援課に不足していた情報のピース。一連の事件の秘密を解き明かすピースがマインツにあるらしい。

そして、どうやら彼らはクロスベルに伝わる古い伝承——神狼の話から、ツアイトを犯人候補に上げていた。だが、遠吠えと色、外見

から犯人ではないと判断。

これで、フェンが上げた人間による犯行の可能性が上がる。

どんどん真相に近づく支援課を見て、フェンは頬を膨らませていた

「むー、私のアドバンテージがぁ……」

『やっぱ、恩返しの際の時間が痛かったな。ま、自業自得だ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7785y/>

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

2012年1月12日21時54分発行